

## 『三体詩』 五言律詩

『三体詩』においては、五言律詩を、①四実、②四虚、③前虚後実、④前実後虚、⑤一意、⑥起句、⑦結句、⑧詠物に区分しているこのうち、

- ⑤一意…首聯から尾聯まで一繋がりになっているもの
- ⑥起句…首聯に特徴の有るもの
- ⑦結句…尾聯に特徴が有るもの
- ⑧詠物…物を詠じたことに特徴が有るもの

であるが、①四実、②四虚、③前虚後実、④前実後虚においては、領聯と頸聯に着目すると共に、実体のあるもの（景物）を述べている場合（典型的には写景）を「実」、実態のないもの（情思・作者の思い、感情）を述べているものを「虚」と呼び、

領聯、頸聯とも「実」である詩を①「四実」、領聯が「虚」、頸聯が「実」である詩を②前虚後実、領聯が「実」で頸聯が「虚」で有るある詩を③前実後虚と呼んでいる。

『三体詩』収録の詩には、難解なものもあるが、『國譯漢文大成・三体詩』には、殆どの詩について、領聯、頸聯の構成が記載されているので、律詩の作詩においては非常に参考になると考えられる。

# 四実

早春遊望

早春遊望

杜審言

獨有宦遊人

獨り 宦遊かんゆうの人有りて

偏驚物候新

偏ひしんえに驚く物候ぶつこうの新なるに

雲霞出海曙

雲霞 海を出でて曙あけ

梅柳渡江春

梅柳 江を渡りて春なり

淑氣催黃鳥

淑氣 黃鳥を催うながし

晴光照綠蘋

晴光 綠蘋りよくひんを照らす

忽聞歌古調

忽たちまち 古調を歌うを聞けば

歸思欲霑巾

歸思きし 巾うしろおを霑うるさんと欲す

## 【語釈】

○遊望：出遊して景色を眺望すること。○宦遊：故郷を離れてほかの地方に行く役人のこと。○物候：万物が気候にに応じて移り変わることに。○雲霞：雲と、かすみ。○曙：夜が明ける。○淑氣：春の和気。○黃鳥：コウライウグイス。○晴光：明るい日の光。○綠蘋：浮草。○古調：古風な調子の詩。○歸思：故郷に帰りたいたいと思う心。○巾：ハンカチ。○沾：涙でぬらすこと。

(参考文献)

『唐詩選』

遊少林寺

少林寺に遊ぶ

沈佺期

長歌遊寶地

長歌して宝地に遊び

徙倚對珠林

徙倚として珠林に対す

雁塔風霜古

雁塔 風霜古り

龍池歲月深

龍池 歲月深し

紺園澄夕霽

紺園 夕霽を澄ましめ

碧殿下秋陰

碧殿 秋陰を下す

歸路煙霞晚

歸路 煙霞の晩

山蟬處處吟

山蟬 処々に吟ず

【語釈】

○少林寺：河南省河南府の崇山にある寺。○宝地：寺院。○徙倚：立ちもとほる  
○珠林：寺院の中の林。○雁塔：寺院内の塔。○龍池：寺院内の池。○紺園：寺  
院内の園。○夕霽：夕方の雨の後の晴れ空。○碧殿：緑色の仏殿。○秋陰：秋の  
夕暮れ。○煙霞：靄と霞。

晚至華陰

晩に華陰に至る

皇甫曾

臘盡促歸心

臘ろう尽きて 帰心を促し

行人及華陰

行人 華陰かいんに及ぶ

雲霞仙掌出

雲霞 仙掌より出で

松柏古祠深

松柏 古祠こし深し

野渡冰生岸

野渡 氷岸に生じ

寒川燒隔林

寒川 焼けて林を隔つ

温泉看漸近

温泉 看て漸く近し

宮樹晚沈沈

宮樹 晩ばんに沈々

【語釈】

○華陰：陝西省華陰市。○臘：蠟燭。○帰心：帰りたいたいという気持。○仙掌：仙人掌のような形をした華山（五嶽の一つ）。○野渡氷生岸：倒置法、氷が野にある渡し場の岸に生じる。○寒川燒隔林：倒置法、野火は寒い川と林を隔てて見る。○温泉：驪山の温泉宮（華清旧）。○沈沈：草木の茂っているさま。

經 廃寶慶寺

は い ほう けい じ  
廃 宝 慶 寺 を 経

唐

司 空 曙

黄葉前朝寺

黄 葉 前 朝 の 寺

無僧寒殿開

僧 無 く し て 寒 殿 開 く

池晴龜出曝

池 晴 れ て 龜 出 で て 曝 し

松暝鶴飛迴

松 暝 く し て 鶴 飛 び 迴 る

古井碑横草

古 井 碑 草 に 横 わ り

陰廊畫雜苔

陰 廊 画 苔 に 雑 る

禪宮亦銷歇

禪 宮 亦 た 銷 歇

塵世轉堪哀

塵 世 轉 た 哀 む に 堪 え たり

【語釈】

○寶慶寺：則天武后が建てた寺で廃寺となっていた。○前朝寺：寶慶寺。○寒殿：荒涼として落ちぶれた寺院。○曝：甲羅ぼし。○陰廊：暗い廊下。○禪宮：寺院。○銷歇：衰え落ちぶれること。○塵世：俗世間。

次北固山下

北固山の下に次るやど

唐 王 灣

客路青山外

客路 青山の外ほか

行舟緑水前

行舟 緑水の前

潮平兩岸闊

潮平かにして 兩岸闊ひらき

風正一帆懸

風正しくして 一帆懸かかる

海日生殘夜

海日 殘夜に生じ

江春入舊年

江春 旧年に入る

鄉書何處達

鄉書 何れの処きょうしよにか 達せん

歸雁洛陽邊

歸雁 洛陽の邊ほどり

【語釈】

○北固山…江蘇省鎮江市の東北にある山。○客路…旅路。○風正…順風。○懸…帆を開く。○海日…海から昇る太陽。○殘夜…夜がまさに尽きようとするとき。○江春…江上の春。○旧年…前年。○鄉書…故郷への手紙。○結句…書を伝えるという雁は故郷の洛陽のあたりに向かって帰る。

岳陽晩景

岳陽の晩景

唐  
張均

晩景寒鴉集

晩景寒鴉集かんあり

秋聲旅雁歸

秋声旅雁歸りよがん

水光浮日去

水光日を浮べて去り

霞彩映江飛

霞彩江かさいに映じて飛ぶ

洲白蘆花吐

洲白くして蘆花を吐き

園红柿葉稀

園紅にして柿葉稀しやうなり

長沙卑濕地

長沙卑湿の地

九月未成衣

九月未だ衣を成さず

【語釈】

○岳陽：湖南省岳陽市。○寒鴉：晩秋から冬にかけての烏。○秋声：秋の気配を感じさせる物音。○霞彩：夕焼けの彩り。○長沙：湖南省長沙市。○成衣：夏服を脱ぎ、冬服を着る。

晚發五溪

晩に五溪を發す

岑 參

客厭巴南地

客は厭う 巴南の地

郷鄰劔北天

郷は隣る 劔北の天

江村片雨外

江村 片雨の外

野寺夕陽邊

野寺 夕陽の邊

芋葉藏山徑

芋葉 山徑を藏し

蘆花間渚田

蘆花 渚田に間わる

舟行未可住

舟行 未だ住まるべからず

乘月且須牽

月に乘じ 且つ須らく牽くべし

【語釈】

○五溪…湖南省懷化市一帶にある五つの溪。○客…旅人。作者。○巴南…五溪のあたり。○劔北…。○片雨…局地的に降る雨。○渚田…渚の側の田。未可住…出發すべきである。○乘月…月明かりを利用して。○牽…曳き船を曳く。



仲夏江陰官舎寄裴明府

李嘉祐

仲夏 江陰の官舎にて裴明府に寄す

萬室邊江次

萬室 江に辺して次し

孤城對海安

孤城 海に對して安し

朝霞晴作雨

朝霞 晴れて雨を作し

濕氣晚生寒

濕氣 晩に寒を生ず

苔色侵衣桁

苔色 衣桁を侵し

潮痕上井欄

潮痕 井欄に上る

題詩招茂宰

詩を題して 茂宰を招き

思爾欲辭官

思ふ 爾が官を辞さんと欲するを

【語釈】

○仲夏：陰曆五月。○江陰：江蘇省無錫市の江陰市。○裴明府：不祥、明府は県令の称号。○萬室：万家。○邊江次：江に沿って次第にある。○孤城：官舎。○安：安全である。○苔色：カビの色。○衣桁：衣を掛ける横木。○井欄：井戸の闌干。○招：留任を勧告する。○茂宰：県官の尊称。

山行

山行

殷遙

寂歴青山曉

寂歴じやくれきたり 青山の曉

山行趣不稀

山行 趣おもむき 稀まれならず

野花成子落

野花 子みを成して落ち

江燕引雛飛

江燕 雛を引いて飛ぶ

暗草薰苔徑

暗草 苔徑たいけいに薰くんじ

晴楊拂石磯

晴楊 石磯せききを払はらう

俗人猶語此

俗人 猶お 此これを語る

余亦轉忘歸

余も亦た 転うたた 帰るを忘る

【語釈】

○寂歴：ひっそりとして物寂しいさま。○不稀：少なからず。○暗草：名前を知らない草。○苔徑：苔の生えた道。○石磯：石の磯。○此：山中の趣味。○轉：ますます。

送陸明府之盱眙

陸明府の盱眙に之くを送る

崔峒

陶令之官去

陶令 官に之きて去る

離愁慘別魂

離愁 別魂を慘ましむ

白煙橫海戍

白煙 海戍に横わり

紅葉近淮村

紅葉 淮村に近し

遠浪搖山郭

遠浪 山郭を揺がし

平蕪到縣門

平蕪 県門に到たる

政成堪吏隱

政 成つて 吏隱するに堪えたり

免負府公恩

府公の恩に 負くことを免る

【語釈】

○陸明府：不祥、○盱眙：泗州（安徽省東北部および江蘇省西部にまたがる地域に設置された）。○陶令：陶淵明、陸明府をなぞらえる。○離愁：離別の愁い。○海戍：海を守る守衛所。○淮村：淮水（河南省に源を發し、安徽省と江蘇省を流れる川。○山郭：山村。○平蕪：原野。○縣門：盱眙の県境の門。○吏隱：官となつても隱者の志を持ち続けること。○府公：州の長官。

【構成】

○首聯は離恨を説き起こし、頷聯、頸聯は道中の景を述べ、尾聯は友の為の訓戒を述べる。

溪南書齋

溪南の書齋

于鵠

茅屋住來久

茅屋 住し來たること久し

山深不閉門

山深くして 門を閉ず

草生垂井口

草は生じて 井口に垂れ

花發擁籬根

花は發きて 籬根を擁す

入院將雛鳥

院に入りて 雛を將いる鳥

攀蘿抱子猿

蘿を攀じて 子を抱く猿

曾逢異人説

曾つて 異人の説に逢う

風景似桃源

風景 桃源に似たり

【語釈】

○茅屋：茅吹きの粗末な家。○籬根：垣根の根本。○院：書院。○異人：漁人。

○桃源：桃源郷（『桃花源記』）

【構成】

○頷聯は非情、頸聯は有情。○題目は書齋であっても、書齋のことは言わず書齋の外のことを示す。

泊揚子岸

揚子の岸に泊す

祖詠

纒入維揚郡

わざか いようぐん  
纒に維揚郡に入れば

鄉關北路遙

きょうかん はるか  
鄉關北路 遙なり

林藏初霽雨

林は藏す 初めて霽るる雨は

風退欲歸潮

風は退く 帰らんと欲する潮

江火明沙岸

江火 沙岸に明かに

雲帆礙浦橋

うんぱん ほきょう さまた  
雲帆 浦橋に礙げらる

客衣今日薄

かくい  
客衣 今日薄く

寒氣近來饒

寒氣 近來饒おほし

【語釈】

○揚子：長江。○維揚郡：江蘇省揚州市。○鄉關：故郷。○雲帆：雲のように大きな帆の舟。○礙浦橋：浦にかけた橋に妨げられて通過することが出来ない。○客衣：旅衣。○近來：近ごろ。○饒：多と同意。

【構成】

○第三句：江上の景。○第四句：江中の景。○頸聯：水中の景。

新秋寄樂天

新秋 樂天に寄す

劉禹錫

月露發光彩

月露 光彩を發す

此時方見秋

此の時 方に秋を見る

夜涼金氣應

夜涼くして 金氣応じ

天靜火星流

天靜かにして 火星流る

蟲響偏依井

虫響いて 偏に井に依り

螢飛直過樓

螢飛びて 直ちに樓を過ぐ

相知盡白首

相知るは 尽く白首

清景復追遊

清景 復た 追遊せんや

【語釈】

○樂天：白居易。○月露：月に照らされた露。○金氣：秋の気配、冷涼。○白首

…白髮頭。○清景：清らかな景色。○追遊：共に鑑賞し共に楽しむ。

（白居易は左遷されて杭州（浙江省杭州市）に、劉禹錫は左遷されて朗州（湖南省常德市）にあった。）

【構成】

○首聯、頷聯、頸聯は秋を述べ、尾聯は自分の思いを述べる。

秋日送客至潜水駅

秋日 客を送り潜水駅に至る

劉禹錫

候吏立沙際

候吏 沙際に立ち

田家連竹溪

田家 竹溪に連なる

楓林社日鼓

楓林 社日の鼓

茅屋午時雞

茅屋 午時の雞

雀噪晚禾地

雀は噪ぐ 晚禾の地

蝶飛秋草畦

蝶は飛ぶ 秋草の畦

驛樓宮樹近

驛樓 宮樹近く

疲馬再三嘶

疲馬 再三嘶く

【語釈】

○潜水駅：浙江省杭州市にある宿場町。○候吏：駅吏。○社日：春と秋の土地の神を祀る祭り。ここでは秋社。○茅屋：茅吹きの家。○晚禾地：稲の実った晩秋の地。○驛樓：二階建ての宿舎。○宮樹：都（呉の都）の樹。

得日觀東房

得日觀とくじつかんの東房

李質

曾入桃溪路

曾かつて桃溪の路に入れば

仙源信少雙

仙源まこと信ならに双すくなび少し

洞霞飄素練

洞霞どうか素練それんを飄ひるがえし

壁蘚畫陰窗

壁蘚へきせん陰窓えがに画えがく

古木疑撐月

古木こも月つきを撐たはうかと疑い

危峰欲墮江

危峰あき江えに墮おちんと欲す

自吟空向寂

自みづから吟かじ空そらしく寂せきに向わんとす

誰共倒秋缸

誰たれと共にともか秋缸しゅうとうを倒たさん

○得日觀：道士の住居（觀）の名。○桃溪路：『桃花源記』の桃源郷への道、得日觀への道になぞらえる。○仙源：道教の仙人の住所。得日觀のこと。○少雙：比べられるものが少ない。○素練：白色の絹のカーテン。○壁蘚：壁に生えた苔。○陰窓：位窓。○危峰：険しい峯。○寂：寂寞。○缸：油つぎ、酒杯の代用。



北固晚眺

北固ほくこの晚眺

唐 竇常

水国芒種後

水国みづくに芒種ぼうしゆの後

梅天風雨涼

梅天うめあま風雨涼し

露蠶開晚簇

露蠶ろさん晚簇ばんぞくを開き

江燕語危檣

江燕かうえん危檣きしやうを語る

山址北來固

山址さんし北來ほくらい固

潮頭西去長

潮頭せうとう西去せいきよ長し

年年此登眺

年々ねんねん此こゝに登眺とうちやうす

人事幾銷亡

人事じんじ幾いくばくか銷亡しやうぼうす

【語釈】

○北固：北固山。江蘇省鎮江市の東北にある山。○晚眺：夕方の眺望。○芒種：旧暦五月。○梅天：梅雨の天気。○露蠶：屋外で飼育されている蚕。○晚簇：。○危檣：高い帆柱。○山址：山の麓。○登眺：登って眺望する。○人事：人のしわざ。○銷亡：消失。

送朱可久歸越中

朱可久が越中に帰るを送る

賈島

石頭城下泊

石頭城下に泊す

北固暝鐘初

北固暝鐘の初

汀鷺衝潮起

汀鷺潮を衝いて起ち

船窗過月虛

船窓月を過ぎして虚なり

吳山侵越衆

吳山越を侵して衆く

隋柳入唐疎

隋柳唐に入りて疎なり

日欲供調膳

日に調膳を供せんと欲す

辟來何府書

辟し來たるは何れの府の書ぞ

【語釈】

○朱可久：朱慶餘、越州（浙江省紹興市）の人、敬宗寶曆二年の進士。秘書省校書郎となる。○越中：浙江省紹興市。○石頭城：南京市にあった城郭。○北固：北固山、江蘇省鎮江市の東北にある山。○暝鐘：晚鐘。○汀鷺：渚にいるサギ。○供調膳：親に膳を整えて差し上げる。○辟來：（孝行）をすると名が皇帝に知れてお召しがある。

【構成】

○首聯、頷聯、頸聯は道中の事を述べ、尾聯は自分の志を示す。

新安江行

新安江行

章八元

江源南出永

江源南に出でて永く

野渡暫維梢

野渡暫く梢を維ぐ

古戍懸魚網

古戍魚網を懸け

空林露鳥巢

空林鳥巢を露す

雪晴山脊現

雪晴れて山脊現われ

沙淺浪痕交

沙淺くして浪痕交わる

自笑無媒者

自ら笑う無媒の者

逢人作解嘲

人に逢い解嘲を作ることを

【語釈】

○新安江：安徽省黄山市新安江。○江源：川のみなもと。○野渡：野原にある渡し場。○梢：帆綱。○古戍：古い物見櫓。○空林：人気の無い葉の落ちた林。○山脊：山の稜線。○浪痕：波が曳いた痕の紋。○解嘲：人のあざけりを弁解する。漢の揚雄の故事（漢書）。

三月五日汎長沙東湖

三月五日 長沙の東湖に汎ぶ

李羣玉

上巳餘風景

上巳じょうし風景を余す

芳辰集遠坳

芳辰ほうしん 遠坳えんけいに集る

湖光迷翡翠

湖光 翡翠ひすいを迷わし

草色醉蜻蜓

草色 蜻蜓せいていを酔わす

鳥弄桐花日

鳥は 桐花とうかの日を弄し

魚翻穀雨萍

魚は 穀雨こくうの萍ひょうを翻えす

從今留勝會

今いまより 勝會しょうかいを留めば

誰看畫蘭亭

誰か看ん 画蘭亭がらんてい

【語釈】

○長沙東湖：湖南省長沙市の東湖。○上巳：上巳の節句。旧曆三月三日。○芳辰：（春の）景色の美しい時候。○遠坳：遙かに遠い郊野。○翡翠：かわせみ。○蜻蜓：とんぼ。○弄：楽しむ。○穀雨：二十四節季の一つ、清明後十五日。○萍：浮き草。○勝會：盛大な宴会。○留：後世に伝わるようにする。○畫蘭亭：王羲之が開いた蘭亭の会を画いた絵。

【構成】

○首聯も対句。○第三句、第六句は水中の景。第四句、第五句は地上の景（互鎖の変格）

送人入蜀

人の蜀に入るを送る

李遠

蜀客本多愁

蜀客本愁多し

君今は勝遊

君今は是に勝遊す

碧藏雲外樹

碧は藏す雲外の樹

紅露驛邊樓

紅は露す驛辺の樓

杜于呼名語

杜于名を呼んで語り

巴江學字流

巴江字を学んで流る

不知煙雨夜

知らず煙雨の夜

何處夢刀州

何れの処にか刀州を夢みん

【語釈】

○蜀客：蜀から来た旅人。○勝遊：景勝地を繞って遊ぶ。○杜于：ホトトギス。蜀の望帝（名は杜于）が死んでその魂がホトトギスになったという伝え。○學字流：巴という字を学んだように、曲がりくねって流れる。○煙雨：霧雨。○夢刀州：榮転して蜀の益州の刺史になること。「刀州夢」（晉書、王濬傳）。

【構成】

○頷聯、頸聯は蜀の事を述べ、首聯、尾聯は人のことを述べる。

七里灘

七里灘しちりたん

許 渾

天晚日沈沈

天く晩れて 日ちんちん沈々

歸舟繫柳陰

歸舟 柳りゅういん陰につな繫ぐ

江村平見寺

江村 平たいらかにして寺を見

山郭遠聞砧

山郭 遠きぬたくして砧を聞く

樹密猿聲響

樹密にして猿聲響き

波澄鴈影深

波澄んで 鴈影深し

榮華暫時事

榮華 暫時の事

誰識子陵心

誰か識らん 子陵の心

【語釈】

七里灘：浙江省権徳市の近くにある早瀬。沈沈：奥深いさま、静かなさま。江村：川辺の村。山郭：山の街。子陵：厳光のこと、光武帝の友人であったが、光武帝が即位しても招きに応ぜず、七里灘に隠棲した。

孤山寺

孤山寺

張 祐

樓臺聳碧岑

樓台 碧岑に聳え

一徑入湖心

一徑 湖心に入る

不雨山長潤

雨ならずして 山長く潤い

無雲水自陰

雲くして 水自ら陰る

斷橋荒蘚合

断橋 荒蘚合し

空院落花深

空院 落花深し

猶憶西窗夜

猶お憶う西窓の夜

鐘聲出北林

鐘声 北林より出でしことを

【語釈】

○孤山：浙江省杭州市の名勝、西湖の中にある山。○碧岑：青緑色の峯。○長：つねに。○斷橋：弧山と岸をつなぐ橋。○荒蘚：荒い苔。○空院：人気のない部屋。○西窗：寢室。

惠山寺

惠山寺 けいざんじ

張 祐

舊宅人何在

旧宅人 いずく 何にか在る

空門客自過

空門客 かく 自ら過ぐ

泉聲到池盡

泉声 池に到りて尽き

山色上樓多

山色 楼に上りて多し

小洞穿斜竹

小洞斜竹 しやちく を穿ち

重塔夾細莎

重塔 ちようかい 細莎 さいさ を夾む はさ

殷勤望城市

殷勤 いんぎん に 城市を望めば

雲水暮鐘和

雲水 暮鐘に和す

【語釈】

○惠山寺：江蘇省無錫市の郊外の惠山にある寺。○舊宅：古い建物。○山色：山の気配。○斜竹：斜めに生えた竹。○重塔：重なった階段。○細莎：細いはまなすげ。○殷勤：心を込めてするさま。



登蒲澗寺後二巖

蒲澗寺後の二巖に登る

李羣玉

五仙騎五羊

五仙 五羊に騎りて

何代降茲鄉

何れの代か 茲の郷に降る

澗有堯時韭

澗には 堯時の韭有り

山餘禹日糧

山には 禹日の糧を余す

樓臺籠海色

樓台 海色を籠め

草樹發天香

草樹 天香を發す

浩笑煙波裏

浩笑 す煙波の裏

浮溟興甚長

溟に浮びて 興甚だ長し

【語釈】

○蒲澗寺：広州府（広東省広州市一帯）の寺。○起句：『寰宇記』『列仙傳』。○茲郷：広州府。○堯時：堯帝が天下を収めていた時代。○韭：菖蒲。○禹日糧：藤の木。『南越誌』禹が藤の根を採って糧となし、饑民を救った。○浩笑：高笑い。○海色：海面が作り出す景色。○天香：芳香の美称。○煙波：靄のかかった水面。○溟：蒼溟、蒼く薄暗い。海。

送僧還南海

僧の南海に還るを送る

李洞

春往海南邊

春に海南の辺ほとりに往き

秋聞半夜蟬

秋に半夜の蟬を聞く

鯨吞洗鉢水

鯨は鉢を洗う水を呑み

犀觸點燈船

犀さいは灯を点ずる船に触る

島嶼分諸國

島嶼とうしよ 諸國を分かち

星河共一天

星河せいか 一天を共にす

長安却迴日

長安 却迴きやくかいの日

松偃舊房前

松は偃ふす 旧房の前

【語釈】

○僧：雲卿上人、河南省新故市の人、韓愈の祖父。○南海：河南省。○半夜：真夜中。○鉢：僧食を入れる鉢。食後水で洗う。○犀：水犀。月を喜ぶ性質がある。○島嶼：島々。○却迴：戻ってくる。○偃：倒れる。玄奘三蔵が西域に行ったとき、松の枝が西に倒れ、帰ったとき東に倒れたという故事。

【構成】

○交股格：第三句と第五句は昼景、第四句と第六句は夜景。

鄠北李生舍

鄠北こほくの李生の舍

唐 李 洞

圭峰秋後夜

圭峰けいほう 秋後の夜

亂葉落寒墟

乱葉かんきよ 寒墟より落つ

四五百竿竹

四五百竿の竹

二三千卷書

二三千卷の書

雲深猿盜栗

雲深くして猿栗を盗み

雨霽蝥沾蔬

雨霽れて蝥あり蔬そに沾す

只隔門前水

只だ 門前の水を隔てて

如同萬里餘

万里余じよごとうに如同す

【語釈】

○鄠：陝西省西安市の一部。○李生：不祥。○圭峰：終南山の別峯。○寒墟：寒空。○蔬：野菜として食用出来る植物。○如同：同じようである。

塞上

塞上

司空圖

萬里隋城在

万里隋城在り

三邊虜氣衰

三辺虜氣衰う

沙填孤障角

沙は填む孤障の角

燒斷故關碑

焼は断つ故関の碑

馬色經寒慘

馬色寒を経て惨み

鵬聲帶晚悲

鵬声晩を帯びて悲し

將軍正閑暇

將軍正に閑暇

留客換歌辭

客を留めて歌辭に換う

【語釈】

○萬里隋城：隋によつて修復された万里の長城。○三邊：南蛮、北狄、西戎。○虜氣：周辺国が中国を侵そうとする気。○孤障：孤立した城塞。○燒斷：（太平の世なので）かがり火を焚くこともない。○鵬：猛禽類、屍肉を食う。○換歌辭：軍事を歌辭に変える。

寄永嘉崔道融

永嘉えいかの崔道融さいどうゆうに寄す

司空圖

旅寓雖難定

旅寓りよぐう 定め難しいんどと雖も

乘閑是勝遊

閑かんに乗じて是に勝遊す

碧雲蕭寺霽

碧雲しようじ 蕭寺は 霽る

紅樹謝村秋

紅樹しやせん 謝村 秋なり

戍鼓和潮暗

戍鼓じゆうこ 潮に和して暗く

船燈照島幽

船燈 島を照らして幽なり

詩家多滯此

詩家 多く此こゝに滯とどまる

風景似相留

風景 相留あいとどむるに似たり

【語釈】

○永嘉：永嘉州（浙江省永嘉県）。○崔道融：不祥。○旅寓：旅の中での仮住まい。○勝遊：心になつた遊びをする。○蕭寺：寺院。○謝村：謝靈運が住んで居た村。○戍鼓：兵營で鳴らす太鼓。○滯：滞留する。

泊靈溪館

靈溪館に泊す

鄭巢

孤吟疎雨絶

孤吟 疎雨 絶ゆ

荒館亂峰前

荒館 乱峰の前

曉鷺棲危石

曉鷺 危石に棲み

秋萍滿敗船

秋萍 敗船に滿つ

溜從華頂落

溜は 華頂從り落ち

樹與赤城連

樹は 赤城と連がる

已有求閑意

已に 閑を求むる意有り

相期在暮年

相期すは 暮年に在り

【語釈】

○靈溪館：不祥、靈溪は溪の美称。○疎雨：疎らな雨。○危石：人が見て危ない  
と思うような岩。○秋萍：秋の浮き草。○敗船：廢船。○溜：滝のこと。○華頂  
：浙江省台州市の華頂峯。○赤城：浙江省台州市の赤城峰。○求閑意：隱棲の意。  
○相期：期待する。○暮年：晩年

甘露寺

甘露寺

孫 魴

寒暄皆有景

寒暄<sup>かんけん</sup> 皆 景有り

孤絶畫難形

孤絶 画<sup>か</sup>けども 形どり難し

地拱千尋嶮

地は 千尋<sup>せんじん</sup>の嶮<sup>けん</sup>を拱<sup>きよう</sup>し

天垂四面青

天は四面<sup>せいた</sup>の青に垂る

晝燈籠雁塔

昼灯 雁塔に籠め

夜磬徹漁汀

夜磬<sup>やけい</sup> 漁汀<sup>とつ</sup>に徹る

最愛僧房好

最も愛す 僧房の好きを

波光滿戸庭

波光 戸庭<sup>こてい</sup>に満つ

【語釈】

○甘露寺…江蘇省鎮江市の北固山の上にある山。○寒暄…四時。○孤絶…高く聳える。○拱…とりまく。○雁塔…甘露寺にある塔の名。○夜磬…夜鳴らす磬（へ）の字型の打楽器）の音。

江行

江行

李咸用

瀟湘無事後

瀟湘無事の後

征棹復嘔啞

征棹復た嘔啞

高岫留斜照

高岫斜照を留め

歸鴻背落霞

歸鴻落霞に背く

魚依沙岸草

魚は沙岸の草に依り

蝶寄湫流槎

蝶は湫流の槎に寄る

共説干戈苦

共に説く干戈の苦

汀洲減釣家

汀洲釣家を減ずと

【語釈】

○瀟湘：湖南省の地。○無事後：兵乱が終わった後。○征棹：船遊びの櫂の音。  
○復：再び。○嘔啞：喧しいさま。○高岫：山の極めて高いところ。○斜照：夕  
陽の光。○落霞：夕焼け。○湫流：逆流。○槎：浮き草。○干戈：戦乱。○汀洲  
…水中の中洲。



春日野望

春日野望

李中

野外登臨望

野外登臨して望めば

蒼蒼煙景昏

蒼々として煙景昏し

暖風醫病草

暖風病草を医し

甘雨洗荒村

甘雨荒村を洗う

雲散天邊影

雲は散ず 天辺の影

潮迴島上痕

潮はうしお迴る島上の痕

故人不可見

故人見るべからず

倚杖役吟魂

杖に倚りて吟魂を役す

【語釈】

○野望：野原の眺め。○登臨：高いところに登って下を眺望する。○蒼蒼：天の青々としたさま。○煙景：霞のかかった景色。○病草：冬にいたんだ草。○甘雨：好時の雨、慈雨。○雲散：賊軍が去ったこと。○天邊：地平線。○吟魂：詩人の魂。

勝果寺

勝果寺

處默

路自中峰上

路は 中峰より上る

盤回出薜蘿

盤回ばんかいして 薜蘿へきらを出す

到江呉地盡

江に到りて 呉地尽き

隔岸越山多

岸を隔てて 越山多し

古木叢青靄

古木 青靄せいあを叢あつめ

遙天浸白波

遙天やうてん 白波ひたを浸す

下方城郭近

下方 城郭近し

鐘磬雜笙歌

鐘磬しょうけい 笙歌しょうかを雜まじう

【語釈】

○勝果寺：浙江省杭州城南の鳳凰山にある寺。○中峰：山の中腹あたり。○盤回：めぐりめぐること。○薜蘿：かづら等の茂。○江：钱塘江。○呉地：現在の江蘇省の地方。○越：現在の浙江省の地方。○遙天：遙かな空。○鐘磬：鐘と磬（への字型の楽器）の音。○笙歌：笛の音と歌声。

（参考文献）『唐詩選』

静林寺

静林寺

僧靈一

静林溪路遠

静林 溪路遠し

蕭帝有遺蹤

蕭帝しょうてい 遺蹤いせき有り

水撃羅浮磬

水は 羅浮らふの磬けいを撃うち

山鳴于闐鐘

山は 于闐うてんの鐘を鳴らす

燈傳三世火

灯は伝う 三世の火

樹老五株松

樹は老ゆ 五株の松

無数煙霞色

無数 煙霞の色

空聞昔臥龍

空しく聞く 昔の臥竜

【語釈】

○静林寺：湖北省襄陽市にある寺。梁の武帝の即位前の住居。○蕭帝：梁の武帝。  
○遺蹤：遺跡。○羅浮磬：羅浮山（広東省増城縣北東にある山）から出た石で出来た磬（石で出来たへの字型の樂器）。○于闐：中国の西域にあったオアシス都市国家。現在の中国新疆ウイグル自治区ホータン縣。この国の鐘は風が吹くと独りで鳴るといふ伝説があった。○三世：過去、現在、未来。○煙霞：靄と霞。  
○昔臥龍：昔、淵に住んでいた龍。

秋夜同梁鍾文宴

秋夜 梁鍾文りょうしゅうぶんとともに宴す

錢起

客到衡門下

客は到る 衡門こうもんの下

盃香蕙草時

杯は香る 蕙草けいそうの時

好風能自至

好風 能く自よら至る

明月不須期

明月 須すべからく期すべからず

秋水翻荷影

秋水 荷影かえいを翻えし

晴霜脆柳枝

晴霜 柳枝せいそうを脆くす

微官是何物

微官 是れ何物ぞ

計可廢吟詩

計可そくぼく 吟詩を廢せん

【語釈】

○梁鍾：不詳、天宝年間の人。○衡門：上に横木を渡しただけの粗末な門、冠木門。○蕙草：香草の一種。○不須期：期待しないでも自然に登ってくる。○荷影：蓮の葉。○脆：脆弱。○是何物：反語、軽んずる意味。○計可：反語、どうしてししようか。

望秦川

秦川を望む

李 頎

秦川朝望迴

秦川朝望迴はるかなり

日出正東峯

日は出ず 正東の峯

遠近山河淨

遠近山河淨く

逶迤城闕重

逶迤いとして 城闕じょうけつ重し

秋聲萬戸竹

秋声 万戸の竹

寒色五陵松

寒色 五陵の松

客有歸歟嘆

客きやくに歸歟きよの嘆なげき有り

悽其霜露濃

悽せいき其として 霜露しもや濃かなり

【語釈】

○秦川：長安一帯。○正東：真東。○逶迤：うねうねと曲がって長く続くさま。  
○城闕：城門、転じて宮殿。○万戸：長安の家々を指す。○秋聲：秋の気配。  
○寒色：冬げしき。○五陵：漢の高祖以下五帝の陵墓、長安の北郊にあった。○  
客：旅人、作者自身を指す。○歸歟：故郷へ帰りたいたいと言う思い。「帰らん歟」。  
歟：助辞、「か」と読む、多くは「與」（与）で代用する。悽其：寒風の形容。其  
は助辞。霜露：霜と露。

（参考文献）『唐詩選』

池上

池上

白居易

嫋嫋涼風動

嫋々として涼風動き

淒淒寒露零

淒々として寒露零つ

蘭衰花始白

蘭衰えて花始めて白く

荷破葉猶青

荷破れて葉猶お青し

獨立棲沙鶴

独り立ち沙に棲む鶴

雙飛照水螢

双飛す水を照らす螢

若爲寥落境

若為んぞ寥落の境

仍值酒初醒

仍お酒の初めて醒むるに値う

【語釈】

○嫋嫋：風のそよぐさま。○淒淒：寂しく冷たいさま。○零：落ちる。○荷：蓮の花。○若爲：「いかにぞ」と読み、「どのように」「いかにして」「どれほど」などの意。○寥落：落ちぶれたさま。

(参考文献) 『新釈漢文大系 白氏文集(九)』

西陵夜居

西陵夜居

吳融

寒潮落遠汀

寒潮 遠汀えんていに落ち

暝色入柴扃

暝色めいしよく 柴扃さいけいに入る

漏永沈沈靜

漏 永くして 沈々ちんちんとして 靜に

燈孤的的清

燈 孤にして 的々てきえきとして 清し

林風移宿鳥

林風 宿鳥を移し

池雨定流螢

池雨 流螢定まる

盡夕成愁絶

盡夕じんせき 愁絶しゆうぜつを成す

啼蛩莫近庭

啼蛩ていきよう 庭なに近づく莫かれ

【語釈】

○西陵…不祥。○落…潮が引く。○暝色…暗い色。○柴扃…柴門、粗末な家。○漏…水時計。○沈沈…奥深く静かなさま。○的的…明らかなさま。○宿鳥…宿っている鳥。○定…一カ所に集まる。○盡夕…夜通し。○愁絶…愁いの激しいこと。○啼蛩…啼いているキリギリス。

旅遊傷春

旅遊 春を傷む

李昌符

酒醒郷關遠

酒醒めて 郷関遠し  
きょうかん

迢迢聽漏終

迢々として 漏の終るを聴く  
ちようちよう るう

曙分林影外

曙は分かる 林影の外  
しよ りんえい ほか

春盡雨聲中

春は尽く 雨声中  
うち

鳥倦江村路

鳥は倦む 江村の路  
う

花殘野岸風

花は残る 野岸の風

十年成底事

十年 底事をか成す  
なじごと

羸馬厭西東

羸馬 西東を厭う  
えいば いと

【語釈】

○旅遊…旅行中。○郷關…故郷。○迢迢…夜が更けてゆくさま。遙かなさま。○底事…何事。○羸馬…瘦せた馬。



春山

春山

貫休

重疊太古色

重疊ちようじようたり 太古の色

濛濛花雨時

濛々もうもうたり 花雨の時

好山行恐盡

好山 行ゆく 尽くるを恐れ

流水語相隨

流水 語りて 相隨あいしたがう

黑壤生紅朮

黒壤こくじよう 紅朮かうじゆつを生じ

黄猿領白兒

黄猿かうえん 白兒を領す

因思石橋月

因よつて思よう 石橋の月

曾與道人期

曾かつて道人と期せしことを

【語釈】

○重疊：たたみのように重なること。○濛濛：薄暗いさま。○花雨：春雨。○黒壤：黒い肥えた土。○紅朮：赤い野草。○因：従つて、そこで。○石橋：天台山の景勝の地。○道人：道を身につけた人。○期：約束する。

送懷州吳別駕

懷州かいしゅうの吳別駕ごべつがを送る

岑參

灞上柳枝黃

灞上柳枝黃なり

壚頭酒正香

壚頭酒ろとう正かんぼに香し

春流飲去馬

春流去馬きよばに飲みずかい

暮雨濕行裝

暮雨行裝こうそを濕うるおす

驛路通函谷

驛路函谷に通じ

州城接太行

州城太行に接す

覃懷人總喜

覃懷人総べて喜ぶ

別駕得王祥

別駕王祥を得たりと

【語釈】

○懷州：河南省焦作市沁陽市。○吳別駕：不祥。別駕は刺史の巡察に随行する官。

○灞上：陝西省西安市の東にあった宿場町。○壚頭：酒屋。○太行：山の名、河

南省西北部、山西省東部、河北省西部にある。○州城：懷州の刺史が駐在する町。

○覃懷：河南省新郷市新郷縣。○王祥：魏末西晉の人、母に孝行して有徳の人として名高い。吳別駕をなぞらえている。

高官谷贈鄭鄠

高官谷にて鄭鄠に贈る

岑參

谷口來相訪

谷口より來りて相訪う

空齋不見君

空齋君を見ず

澗花然暮雨

澗花暮雨に然え

潭樹暖春雲

潭樹春雲暖かなり

門徑稀人迹

門徑人迹稀に

簷峰下鹿羣

簷峰鹿群下る

衣裳與枕席

衣裳と枕席と

山靄碧氛氲

山靄碧氛氲

【語釈】

○高官谷…不祥。○鄭鄠…不祥。○相訪…訪問する。相は行動が相手に及ぶ殊を示す。○空齋…人氣の無い書齋。○澗花…溪に咲く花。○潭樹…淵に望む樹。○門徑…門の前の道。○簷峰…家のひさしのような形をした峰。○山靄…山にかか  
る靄。○氛氲…氣の盛んなさま。

山居即事

山居即事

王維

寂寞掩柴扉

寂寞せきぼくとして 柴扉さいひを掩い

蒼茫對落暉

蒼茫そうぼうとして 落暉らくきに対す

鶴巢松樹遍

鶴は 松樹に巢いて遍く

人訪蕚門稀

人は 蕚門ひつもんを訪ふこと稀なり

綠竹含新粉

綠竹 新粉を含み

紅蓮落故衣

紅蓮こうれん 故衣こいを落とす

渡頭煙火起

渡頭ととう 煙火起る

處處采菱歸

処々 菱を采りて歸る

【語釈】

○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○柴扉：柴で作った戸、粗末な住居。○蒼茫：水面などの青青として果てしなく広いさま。○落暉：夕日の光。○蕚門：柴や竹を編んで作った粗末な門。○紅蓮：紅色の蓮。○故衣：古くから着た衣「花びらを編んで例えている」。○渡頭：渡し場。○煙火：ともしび。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 3』

題薦福寺衡嶽禪師房

薦福寺の衡岳禪師の房に題す

韓 翃

春城乞食還

春城 食を乞いて還える

高論此中閑

高論 此の中に閑なり

僧臘塔前樹

僧臘そうろう 塔前かいぜんの樹

禪心江上山

禪心 江上の山

疎簾看雪卷

疎簾 雪を見て卷き

深戸映花關

深戸 花を映じて関とざす

晚送門人去

晚に 門人を送り去り

鐘聲杳靄間

鐘声 杳靄こんあいの間かん

【語釈】

○薦福寺：陝西省西安市薦福寺。○衡岳禪師：不祥。○僧臘：受戒後の期間。○塔前：きざはしの前。○門人：参詣の人。○杳靄：遙かな雲。

送史澤之長沙

史澤したくの長沙いに之いくを送る

司空曙

謝朓懷西府

謝朓しゃちやう 西府せいふを懷よう

單車觸火雲

單車 火雲かぐもに触ふる

野蕉依戍客

野蕉やしやう 戍客じゆかくに依より

廟竹映湘君

廟竹びやうちく 湘君しやうくんに映うつり

夢渚巴山斷

夢渚ぼうちよ 巴山はさん断たえ

長沙楚路分

長沙ちやうさ 楚路そろ分わる

一杯從別後

一杯 別わかれて從より後

風月不相聞

風月 相聞あひまかず

【語釈】

○史澤：不祥。○長沙：湖南省長沙市。○謝朓：南朝齊の詩人・文学者。同族の謝靈運・謝惠連とともに、六朝時代の山水詩人として名高く、あわせて「三謝」と称される。○西府：建業（南京）の西の地名。この場合は西府の同僚のこと。謝朓を史澤に、作者を西府の同僚になぞらえている。○單車：一両の車。急用の為に宿駅に用意してある。○火雲：夏の暑さ。○戍客：太守。○野蕉依戍客：長沙に多い芭蕉が太守である史澤の住居に寄りかかるといふ意。○廟竹：湘君廟にある竹。○湘君：廟内の湘君の木像。○夢渚：雲夢沢のこと、湖南省岳州市に属す。○巴山：湖北省惠州荊州にある山。○楚路：湖北省の道。

送裴侍御歸上都

裴侍御が上都に帰るを送る

張謂

楚地勞行役

楚地 行役に勞す

秦城罷鼓鞀

秦城 鼓鞀を罷む

舟移洞庭岸

舟は移る 洞庭の岸

路出武陵谿

路は出ず 武陵の谿

江月隨人影

江月 人影に隨い

山花逐馬蹄

山花 馬蹄を逐う

離魂將別夢

離魂 別夢を將つて

先爾到關西

爾に先つて 關西に到る

【語釈】

○裴侍御：不祥。侍御は天子のお側に使える人。○上都：長安。○楚地：春秋時代の楚の国の地。○行役：官命により土木工事、国境の守りに就くこと。○秦城：長安。○罷鼓鞀：安祿山の乱が治まったこと。○洞庭：洞庭湖。○武陵谿：湖南省常德市武陵溪。○離魂：肉体を離れた魂。○別夢：別れの夢。○關西：長安。

過蕭關

蕭關を過ぐ

張 蠟

出得蕭關北

蕭關の北に出ずるを得たり

儒衣不稱身

儒衣身に称わず

隴狐來試客

隴狐来りて客を試み

沙鶻下欺人

沙鶻下りて人を欺く

曉戍殘烽火

曉戍烽火残り

晴原起獵塵

晴原 獵塵起る

邊戎莫相忌

邊戎 相忌むこと莫かれ

非是霍家親

是れ 霍家の親にあらず

【語釈】

○蕭關：寧夏回族自治区の固原の東南にあった関所。○儒衣：儒者の着る服。○隴狐：塚の穴に住む狐。○沙鶻：砂浜に住むクマダカ。○曉戍：曉の防衛のため  
のとりで。○烽火：のろし火。○獵塵：獵をするための馬蹄の煙。○邊戎：辺境  
の地の少数民族。○相忌：（自分を）嫌う。○霍家親：霍去病の親族。



秋夜宿僧院

秋夜僧院に宿す

劉得仁

禪寂無塵地

禪寂ぜんじやく 無塵むじんの地

焚香話所歸

香を焚たききて 所歸しよきを話わす

樹搖幽鳥夢

樹うゑは 幽鳥ゆうじやうの夢むを揺ゆかし

螢入定僧衣

螢へいは 定僧じやうそうの衣いに入る

破月斜天半

破月はげつ 天半てんぱんに斜しやめに

高河下露微

高河こうか 露ろを下くだして微かすかなり

翻令嫌白日

翻かえつて 白日はくじつは嫌きらわしむ

動即與心違

動やまもすれば 即ただち心こころと違ちがう

【語釈】

○禪寂：静かに思慮瞑想に耽ること。○所歸：自分の道において心の帰着すること。○幽鳥：声無く隠れ住む鳥。○定僧：座禪に入った僧。○破月：片月。○天半：空の中央。○高河：天の川。○白日：明るい太陽。

宿宣義池亭

宣義せんぎの池亭に宿す

劉得仁

暮色遶柯亭

暮色 柯亭かていを遶めぐり

南山出竹青

南山 竹を出て青し

夜深斜舫月

夜は深し 斜舫しゃぼうの月

風定一池星

風は定まる 一池の星

島嶼無人跡

島嶼とうしょ 人跡無く

菰蒲有鶴翎

菰蒲こほ 鶴翎かくしやう有り

此中休便得

此うちの中に休せんば便すなわち得ん

何必泛滄溟

何ぞ必ずしも 滄溟そうめいに泛ばん

【語釈】

○宿宣：浙江省紹興市会稽山の地名。○池亭：池の畔にある亭。○柯亭：浙江省紹興市西南の地名。○斜舫：斜めになっている舟。○島嶼：島々。○菰蒲：マコモとガマ。○鶴翎：鶴の羽。○滄溟：大海原。○何必泛滄溟：論語「子曰、「道不行、乘桴浮於海、從我者、其由與。」を踏まえる。

送殷堯藩遊山南

殷堯藩いんぎょうはんの山南に遊ぶを送る

姚合

詩境西南遠

詩境 西南遠し

秋聲晝夜蛩

秋聲 晝夜の蛩きょう

人家連水影

人家 水影に連なり

驛路在山峯

驛路 山峰に在り

溪靜雲生石

溪靜かにして雲石に生じ

天晴雪覆松

天晴れて雪松を覆う

我爲公府繫

我公府こうふに繫つながれた為り

不得此相從

此こゝに相從あひしたがうを得ず

【語釈】

○殷堯藩：浙江省嘉興の人。憲宗元和九年の進士、侍御史となる。○遊山南：湖南觀察使李翱の幕僚として長沙に赴く。○詩境：詩情あふれる境地。○秋聲：秋の気配を感じさせる物音。○公府：官府。役人の勤め先。

題李凝幽居

李凝りぎの幽居に題す

賈島

閑居少鄰並

閑居りんぐい隣並りんぐい少なし

草徑入荒園

草徑そうけい荒園に入る

鳥宿池中樹

鳥は宿る 池中の樹

僧敲月下門

僧は敲く 月下の門

過橋分野色

橋を過ぎて 野色を分ち

移石動雲根

石を移して 雲根を動かす

暫去還來此

暫く去りて 還かえつて此こゝに來らん

幽期不負言

幽期 言に負かず

【語釈】

○李凝…不詳。李凝ともする。○幽居…静かなわび住まい。○閑居…静かな住まい。○少…まれである。○鄰並…隣り合う住まい。○草徑…草深い小道、田舎道。○荒園…荒れ果てた畑。○池邊…池の畔。○過橋…橋を渡る。○分…分かつ、分け隔てる。○野色…野原の景色。○雲根…山の高いところ。○幽期…奥深い約束。○不負…そむかない。

(参考文献) ブログ (詩詞世界)

金山寺

金山寺

張 祐

一宿金山寺

一宿金山寺

微茫水國分

微茫びぼう水國を分つ

僧歸夜船月

僧は歸る夜船の月

龍出曉堂雲

竜は出ず曉堂の雲

樹色中流見

樹色中流に見る

鐘聲兩岸聞

鐘聲兩岸に聞ゆ

因悲在城市

因よりて悲しむ城市に在りて

終日醉醺醺

終日酔いて醺くんくん々たるを

【語釈】

○金山寺：江蘇省鎮江市にある寺。○微茫：かすかでぼんやりしているさま。○  
城市：俗世間の意。○醺醺：酒の匂いをいう。

商山早行

商山早行

温庭筠

晨起動征鐸

晨あしたに起き 征鐸せいたくを動かす

客行悲故郷

客行かくこう 故郷を悲しむ

雞聲茅店月

雞聲けいせい 茅店の月

人迹板橋霜

人迹じんせき 板橋の霜

槲葉落山路

槲葉かいよう 山路に落ち

枳花明驛牆

枳花きか 驛牆えきしように明あきらなり

因思杜陵夢

因よりて思よう 杜陵の夢

鳧雁滿迴塘

鳧雁ふがん 迴塘かいとうに満みつ

【語釈】

商山：山の名。陝西省商県の東南にある、漢代の初めに、四人の隠士が乱を避けて隠れ住んだことで有名、四人とも鬚ひげや眉が皓白の老人であったので、「商山の四皓」と呼ばれた。早行：早朝に旅立つこと。晨起：朝早く起きる。征鐸：旅の車の鈴。動：あるいは鈴を鳴らしつつ車を進めること。客行：故郷を離れ、旅路にあること。茅店：茅かや葺ぶき屋根の粗末な宿屋。人迹：人の足あと。板橋：木の板を渡しただけの粗末な橋。槲葉：かしわの葉。枳花：からたちの花。驛牆：駅舎の土塀。因思：そこでふと思いつた。鳧雁：野鴨と雁。迴塘：回るように湾曲した池、曲江を指すと思われる。

(参考文献)

『唐詩三百首』

秋日送方干遊上元

秋日 方干ほうかんの上元じょうげんに遊ぶを送る

曹松

天高淮泗白

天高く 淮わい泗し白し

料子趣修程

料はか子しが 修程しゅうていに 趣おもむくことを

汲水疑山動

水を汲めば 山の動くかと疑い

揚帆覺岸行

帆を揚げて 岸の行くかと覺ゆ

雲離京口樹

雲は離る 京口の樹

鴈入石頭城

鴈は入る 石頭城せきとうじょう

後夜分遙念

後夜 遙念ようねんを分わかたば

諸峰霜露生

諸峰 霜露そうろ生ぜん

【語釈】

○晩唐の詩人新定（浙江省建德県）の人。宣宗の大中年間に、進士を受験して失敗。会稽の鏡湖に隠棲をして、布衣で終わった。○上元：南京市江寧県。○淮泗：淮水（江蘇省を流れる川）と泗水（淮水に合流する川）。○修程：長い道のり。○京口：浙江省鎮江市の地名。○石頭城：南京市の古名。○後夜：別れて後の夜。○（相手を）遙かに思う気持ち。

寄睦州陸

陸睦州りくむつしゅうに寄す

許棠

下國多高趣

下國かこく高趣多し

終年半是吟

終年こ半ば是れ吟

汐潮通越分

汐潮せきしやう越分えつぶんに通じ

部伍雜蠻音

部伍ぶご蛮音ばんおんを雜まじう

曉郭雲藏市

曉郭せうかく雲市うんしを藏し

春山鳥護林

春山しゅんざん鳥林ちうりんを護る

東遊雖未遂

東遊とうゆう未だ遂いそとげずと雖も

日日至中心

日々にち中心しんしんに至る

【語釈】

○陸睦州：不祥。睦州は睦州（浙江省杭州市建德市）の刺史。○下國：地方の下等の国。小国。○高趣：高尚な趣の在る風景。○汐潮：潮、海原。○越分：越の地方との分点。○部伍：軍隊の部分けの組。○蠻音：南蛮の方言。○日日至中心：東遊（睦州に行こうと思う）気持は日々心の中にある。



與崔員外秋直

崔員外さいいんがいと秋に直す

王維

建禮高秋夜

建礼 高秋の夜

承明候曉過

承明 曉の過ぐるを候まつ

九門寒漏徹

九門 寒漏徹かんろうてつし

萬井曙鐘多

万井 曙鐘多しよしやう

月迴藏珠斗

月は廻りめぐて 珠斗しゅとを藏し

雲消出絳河

雲は消えて 絳河じやうかを出だす

更慙衰朽質

更に慙はず 衰朽すいきゆうの質の

南陌共鳴珂

南陌なんぼく 共に珂かを鳴すことを

【語釈】

○建礼：宮門の名。尚書省がこの前に置かれた。○承明：漢代の未央宮にある侍従の部屋。転じて宿直の場所。○九門：宮廷の門。○寒漏：寒々とした水時計の音。○万井：千門万户。○珠斗：北斗七星。○絳河：天の川。○衰朽：老い衰えて能力のないこと。○南陌：南に面する道路。天子の住まいの道。○珂：礼服や馬に付ける装飾の具。

送梓州李使君

梓州ししゅうの李使君りしきんを送る

王維

萬壑樹參天

萬壑樹 天に參し

千山響杜鵑

千山 杜鵑響とけんく

山中一夜雨

山中 一夜の雨

樹杪百重泉

樹杪じゆしやう 百重の泉

漢女輸寶布

漢女 寶布そうふを輸いたし

巴人訟芋田

巴人 芋田うでんを訟うう

文翁翻教授

文翁 翻かえつて教授す

不敢倚先賢

敢あえて 先賢に倚よらざらんや

【語釈】

○梓州：四川省三台県。○李使君：不詳、使君は刺史のこと。○萬壑：多くの谷あい。○參天：高く伸びて天に達する。○杜鵑：ホトトギス。○一半雨：山が深く暗いため、晴れと雨とが交錯する。○樹杪：木の梢。○百重泉：木の梢から雨が泉のように落ちてくる。○幢布：幢という木の花で織った布。○輸：粗税として納めること。○巴人：重慶地方の人。○文翁：前漢の蜀の太守で、民の強化に努めた。○翻：物を反対の方向に転じる意。未開の土地で蜀を文化ある地に改めたこと。○先賢：昔の賢人、文翁。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 3』

送楊長史赴果州

楊長史の果州に赴くを送る

王維

褒斜不容幘

褒斜幘を容れず

之子去何之

之子去りて何くにか之く

鳥道一千里

鳥道一千里

猿聲十二時

猿聲十二時

官橋祭酒客

官橋祭酒の客

山木女郎祠

山木女郎の祠

別後同明月

別後明月を同じうせば

君應聽子規

君応に子規を聴くべし

【語釈】

○楊長史：不祥。○果州：四川省南充市。漢中から北の秦嶺を越えて蜀に入る棧道。○幘：車。○之子：親しみを込めて相手を呼ぶ言葉。○鳥道：鳥しか通わな  
いような険しい道。○官橋：官営の橋。○祭酒：送る者が送られる者についてい  
う言葉。○女郎祠：果州の金華山にある謝自然という女神を祀る祠。○子規：ホ  
トトギス、故郷を思い出させるといふ。

赴京途中遇雪

京に赴く途中雪に遇う

孟浩然

迢遞秦京道

迢遞たり 秦京の道

蒼茫藏暮天

蒼茫たり 藏暮の天

窮陰連晦朔

窮陰 晦朔を連ね

積雪遍山川

積雪 山川に遍し

落雁迷沙渚

落雁 沙渚に迷い

飢鳥噪野田

飢鳥 野田に噪ぐ

客愁空佇立

客愁いて 空しく佇立し

不見有人煙

人煙 有るを見ず

【語釈】

○迢遞：遠く遙かなさま。○秦京：秦の都咸陽。○蒼茫：果てしなく広がって視界のかすかなさま。○窮陰：陰の気が窮まる旧暦十二月、冬の末。○晦朔：旧暦十一月から旧暦十二月。○沙渚：砂浜の渚。○饑鳥：饑えた鴉。○客愁：旅の愁い（を抱いた作者）。○佇立：何時までもたたずむ。○人煙：人家から立ち上るかまどの煙。

（参考文献）

『新釈漢文大系 詩人編 3』

早行

早行

郭良

早行星尚在

早行星尚お在り

數里未天明

數里未だ天明てんめいならず

不辨雲林色

雲林の色を弁ぜぜず

空聞風水聲

空しく風水の声を聞く

月從山上落

月は山上より落ち

河入斗間横

河は斗間とかんに入りて横わたわる

漸至重門外

漸ようやく至る重門ちようもんの外そと

依稀見洛城

依稀いきとして洛城を見る

【語釈】

○早行…朝早くでかけること。○天明…夜明け。○河…天の川。○斗間…北斗七星の間。○重門…幾つも重なり合った門。○依稀…ぼんやりと。○洛城…洛陽。

荆溪館呈丘義興

荆溪館けいけいかんにて丘義興きゅうぎこうに呈す

嚴維

失路荆溪上

路を失す 荆溪けいけいの上

依仁忽暝投

仁に依りて 忽たちまち暝めい投とうす

長橋今夜月

長橋 今夜の月

陽羨古時州

陽羨ようい 古時こじの州

野燒明山郭

野燒やしやう 山郭さんかくに明かに

寒更出縣樓

寒更かんこう 県樓けんろうより出ず

先生能館我

先生 能く我を館す

何事五湖遊

何ぞ 五湖の遊を事とせん

【語釈】

○荆溪：江蘇省常州市荆溪。○丘義興：不祥。義興は江蘇省無錫市宜興市で、その県令であったと思われる。○暝投：晩になってやどる。○陽羨：江蘇省無錫市宜興市。○寒更：寒々とした時を告げる水時計の音。○縣樓：県の役所の樓。○先生：丘義興のこと。○館：泊まらせる。○五湖遊：范蠡が効なりて後に官を辞して五湖に舟を浮かべて去ったこと。

漂母墓

漂母の墓

劉長卿

昔賢懷一飯

昔賢<sup>せきけん</sup> 一飯<sup>いちばん</sup>を懷<sup>おも</sup>う

茲事已千秋

茲事<sup>じじ</sup> 已<sup>じ</sup>に千秋

古墓樵人識

古墓<sup>こぼ</sup> 樵人<sup>しょうじん</sup>識<sup>し</sup>り

前朝楚水流

前朝<sup>ぜんてう</sup> 楚水<sup>そすい</sup>流<sup>なが</sup>る

渚蘋行客薦

渚蘋<sup>しよひん</sup> 行客<sup>こうかく</sup>薦<sup>すす</sup>め

山木杜鵑愁

山木<sup>さんぼく</sup> 杜鵑<sup>とけん</sup>愁<sup>なげ</sup>う

春草年年綠

春草<sup>はるくさ</sup> 年々<sup>ねんねん</sup>綠<sup>ろく</sup>なり

王孫舊此遊

王孫<sup>わうそん</sup> 旧<sup>むかし</sup> 此<sup>こゝ</sup>に遊<sup>あそ</sup>ぶ

【語釈】

○漂母…糸さらしのおばあさん（韓信の恩人の漂母）。○昔賢…韓信。○懷一飯…飢えていたとき食事を恵んでもらったこと。○茲事…起句のできごと。○樵人…樵。○前朝…そのときそのまま、此の地はそのとき楚と呼ばれた。○渚蘋…渚にある浮き草の一種。○行客…旅人。○薦…お供えをする。○王孫舊此遊…楚辞「招隱士」王孫遊不帰 春草生萋萋。

湖中閑夜

湖中閑夜

朱慶餘

釣艇同琴酒

釣艇ちやうてい 琴酒きんしゆを同じうす

良宵背水濱

良宵りやうしやう 水浜すいひんに背く

風波不起處

風波ふうは 起こころざる處

星月盡隨身

星月せいげつ 尽じんく身に隨う

浦迴湘煙卷

浦迴はるかにして 湘煙しやうえん卷まき

林香嶽氣春

林香かんば しくして 岳氣がくき春はるなり

誰知此中興

誰か知らん 此こゝの中の興きよう

寧羨五湖人

寧いずくんぞ 五湖ごこの人を羨うらやまんや

【語釈】

○良宵：景色の美しい宵。○背水濱：岸辺を背にして舟を進める。○湘煙：瀟湘地方の雲。○岳氣：洞庭湖の回りの山岳からの氣。○五湖人：功がなつて後に五湖に浮かんで去つた范蠡。



# 四虚

陸渾山莊

陸渾りくこんの山莊

宋之問

歸來物外情

歸り来る物外の情

負杖闕巖耕

杖を負いて巖耕がんこうを闕えらぶ

源水看花入

源水花を看て入り

幽林採藥行

幽林藥を採りて行く

野人相問姓

野人姓あいとを相問う

山鳥自呼名

山鳥みずか自ら名を呼ぶ

去去獨吾樂

去々きよきよ独り吾れ楽しんで

無能愧此生

無能此の生を愧ず

## 【語釈】

○陸渾：陸渾山。洛陽にある山。○物外：世の中の外。○巖耕：山中の耕作地を耕す。○闕：視察する。○野人：田舎の人。○相問：（自分に向かつて）問いかける。相は行為が相手に及ぶことを示す助字。○去去：物事に頓着せず。

新年作

新年の作

宋之問

郷心新歲切

郷心 新歲切しんさいなり

天畔獨潛然

天畔 独り潛然さんぜんたり

老至居人下

老至りて 人の下に居し

春歸在客先

春歸りて 客の先に在り

嶺猿同旦暮

嶺猿れいえん 旦暮たんぼを同じくし

江柳共風煙

江柳 風煙を共にす

已似長沙傳

已に長沙の傳ふに似たり

從今又幾年

今より 又幾年

【語釈】

○郷心…故郷を思う気持ち。○天畔…天際。空のはて。○潛然…涙の落ちるさま。さめざめ。○嶺猿…峰に住む猿。○旦暮…日夜。終日。○風煙…風光と煙景。○長沙傳…漢の買誼。讒言のために長沙に流されていたことがあった。

喜鮑禪師自龍山至

鮑禪師の龍山より至るを喜ぶ

劉長卿

故居何日下

故居 何れの日か下る

春草欲芊芊

春草 芊々たらんと欲す

猶對山中月

猶お 山中の月に対して

誰聽石上泉

誰か 石上の泉を聴かん

猿聲知後夜

猿声 いて 後夜を知り

花發見流年

花 発いて 流年を見る

杖錫閑來往

錫を杖きて 閑かに來往し

無心到處禪

無心 到る処に禪す

【語釈】

○喜鮑禪師…不祥。○龍山…不確定。○故居…前に住んでいた所。○芊芊…草木が盛んに生い茂るさま。○後夜…夜半から明け方までの間。○流年…過ぎ去る年月、転じて年月。○錫…錫杖。

酬秦系

秦系に酬<sup>むく</sup>ゆ

劉長卿

鶴書猶未至

鶴書<sup>かくしよ</sup>猶お未だ至らず

那出白雲來

那<sup>な</sup>んぞ白雲を出でて来る

舊路經年別

旧路<sup>きよ</sup>年を經て別れ

寒潮毎日迴

寒潮<sup>かえ</sup>毎日迴る

家空歸海燕

家空しうして海燕<sup>かいえん</sup>帰り

人老發江梅

人老いて江梅<sup>ひら</sup>發く

最憶門前柳

最も憶う門前の柳

閑居手自栽

閑居して手<sup>てみずから</sup>自栽えしことを

【語釈】

○秦系…劉長卿の友人。○鶴書…朝廷が賢者を招く詔書。○白雲…白雲が湧くよ  
うな山中（隱棲の地）。○閑居…することもなく、のんびり暮らす。○自栽…陶  
淵明が隱棲するに際して自ら柳を植えたことに倣ったこと。

送朱放賊退後往山陰

朱放しゅほうの賊退きて後山陰に往くを送る

劉長卿

越州初罷戰

越州えつしゅう初めて戦うを罷め

江上送歸橈

江上きんじやう歸橈を送る

南渡無來客

南渡來客無し

西陵自落潮

西陵自ら潮を落す

空城垂故柳

空城故柳垂れ

舊業廢春苗

旧業春苗を廢す

閭里稀相見

閭里こうり相見ること稀に

鶯花共寂寥

鶯花おうか共に寂寥たらん

【語釈】

○朱放：襄州襄陽（湖北襄樊）の人。安史の乱中剡縣に逃れたが、代宗宝応年間、山陰に居を移す。○賊：永王李璘（肅宗の弟）。○山陰：浙江省紹興市。○越州：浙江省紹興市。○歸橈：帰って行く舟。○南渡：呉越の地方。○西陵：浙江省蕭山市。○舊業：昔の田畑などの財産。○閭里：平民。山陰の住人。

尋南溪常道人隱居

南溪の常道人の隱居を尋ぬ

劉長卿

一路經行處

一路 經行の處

莓苔見履痕

莓苔 履痕を見る

白雲依靜渚

白雲 靜渚に依り

春草閉閑門

春草 閑門を閉ざす

過雨看松色

雨を過ぎて 松色を看

隨山到水源

山に随つて 水源に到る

溪花與禪意

溪花と禪意と

相對亦忘言

相對して 亦た言を忘る

【語釈】

○南溪：浙江省紹興市の南にある鏡湖の南溪か。○常山道人：劉長卿の知人らしいが、未詳、「道人」は道士、俗世間をはなれた隱者。○莓苔：こけ。○履痕：履き物の跡。○依：たなびく。○靜渚：しずかな水ぎわの地。○過雨：雨があがったあと。○隨山：山路をたどる。○禪意：道を修めて心を静めること

(参考文献) 『唐詩三百首』

題元録事開元所居

元録事の開元所居に題す

劉長卿

幽居蘿薜情

幽居 蘿薜（へきら）の情

高臥紀綱行

高臥 紀綱（きこう）の行

鳥散秋鷹下

鳥散（し）じ 秋鷹（しゅうよう）下り

人閑春草生

人閑かに 春草生ず

冒風歸野寺

風を冒（おか）して 野寺に帰り

收印出山城

印を收めて 山城を出ず

今日新安郡

今日 新安郡

因君水更清

君に因りて 水更に清し

【語釈】

○元録事：不詳、録事は官名（録事参軍）で、刺史に下属する官。○幽居：世を避けて静かなところに住む。○蘿薜：蔦や葛、山深い処の象徴、蘿薜情とは、そこを慕う気持。○高臥：高逸の心を持って隠棲すること。○紀綱：法律規則。○鳥散：小子どもが恐れて退散すること。○秋鷹下：元録事が隠棲したことを喩える。○收印：官職を辞する。○新安郡：歙州、浙江省杭州市や安徽省黃山市にまたがる。

寄靈一上人

靈一上人れいいつしやうにんに寄す

劉長卿

高僧本姓竺

高僧ほんせい本姓じくは竺

開士舊名林

開士 旧名は林

一入春山裏

一たび春山うちの裏いに入り

千峰不可尋

千峰 尋ぬべからず

新年芳草徧

新年 芳草あまね徧く

終日白雲深

終日 白雲深し

欲徇微官去

微官したかに徇したがいて去らんと欲す

懸知訝此心

懸はるかに知る此の心いづかを訝いづからんことを

【語釈】

○靈一上人…不祥。○開士…菩薩。○芳草…かおりぐさ。○徇微官…天子の命により微官となる。○懸知…離れていても知る。○此心…官吏となって俗世間に埋もれようとする心。



除夜宿石頭驛

除夜 石頭駅に宿す

戴叔倫

旅館誰相問

旅館 誰か相問わん

寒燈獨可親

寒灯 独り親しむべし

一年將盡夜

一年 將に尽きんとする夜

萬里未歸人

万里 未だ帰らざる人

寥落悲前事

寥落 前事を悲しむ

支離笑此身

支離 此の身を笑う

愁顔與衰鬢

愁顔と衰鬢と

明日又逢春

明日 又春に逢う

【語釈】

○寒燈：冬の夜の灯。○寥落：落ちぶれた様。○前事：今までの人生で起こったこと。○支離：ちぐはぐなこと。○愁顔：愁いに満ちた顔。○衰鬢：苦労や老年のために艶を失った、又は薄くなった髪の毛。

汝南逢董校書

汝南にて董校書に逢う

戴叔倫

擾擾倦行役

擾々として行役に倦み

相逢陳蔡間

相逢う 陳蔡の間

如何百年内

如何ぞ 百年の内

不見一人閑

一人の閑なるを見ず

對酒惜餘景

酒に対して 余景を惜み

問程愁亂山

程を問いて 乱山を愁う

秋風萬里路

秋風万里の路

又出穆陵關

又 穆陵関を出す

【語釈】

○汝南：中国河南省駐馬店市の県。○校書：校書郎、秘書を校堪することを司る官。○擾擾：こたごたしたさま。○行役：仕事としての旅行。○相逢：出会う。○陳蔡間：陳と蔡の間（孔子が難儀したところ）。○餘景：残っている光。○程：道のり。○亂山：不揃いに連なっている山々。○穆陵關：山東省青州府にあった関所。

江上別張勸

江上 張勸ちやうかんに別る

戴叔倫

年年五湖上

年々 五湖の上

厭見五湖春

厭いとい見る 五湖の春

長醉非關酒

長醉 酒いに関するに非ず

多愁不爲貧

多愁 貧いの爲ならず

山川迷道路

山川 道路いに迷い

伊洛暗風塵

伊洛 風塵い暗し

今日扁舟別

今日 扁舟わかの別

俱爲滄海人

俱ともに 滄海そうかいの人と為るな

【語釈】

○張勸：人名、不詳。○五湖：江蘇省と浙江省の間にある大湖。○伊洛：伊水と洛水、共に洛陽付近を流れる川。○暗風塵：その地方が安定でないこと。○滄海：海、あてどない旅の比喩。

送丘爲落第歸江東

丘為が落第して江東に帰るを送る

王維

憐君不得意

憐む 君が意を得ず

況復柳條春

況いわんや復また 柳条の春

爲客黃金盡

客かくと為りて 黄金尽き

還家白髮新

家に還かへつて 白髮新あらなり

五湖三畝宅

五湖 三畝の宅

萬里一歸人

万里 一歸人

知爾不能薦

爾なんじを知しつて 薦すすむること能あたわず

羞稱獻納臣

獻納けんのうの臣と称せらるるを羞はず

【語釈】

○丘爲…盛唐の詩人。○落第…科挙に不合格となること。○江東…長江下流の南岸地方。○五湖…太湖とその他の五つの湖、丘爲の故郷の地。○三畝宅…狭い屋敷。○獻納臣…皇帝に忠言をする官、王維はこのとき左補闕。

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 3』

岳州逢司空曙

岳州がくしゅうにて司空曙しくこうしよに逢う

李端

共有髻年故

共にちようねん髻年この故有り

相逢萬里餘

相逢あひあう萬里余

新春兩行淚

新春りようこう兩行の淚

故國一封書

故國一封の書

夏口帆初落

夏口帆初めて落ち

涪陽雁正疎

涪陽しんよう雁まひ正そに疎なり

唯當執杯酒

唯だまさ當に杯酒とを執りて

暫食漢江魚

暫しばらく漢江の魚くわを食うべし

【語釈】

○岳州：湖南省岳陽市。○司空曙：中唐の詩人。○髻年：幼年。○夏口：湖北省武漢市夏口。○涪陽：湖南省常德市澧縣。

洛陽早春

洛陽の早春

顧況

何地避春愁

何れの地にか 春愁を避けん

終年憶舊遊

終年 旧遊を憶う

一家千里外

一家 千里の外

百舌五更頭

ひやくせつ 百舌 はじめ 五更の頭

客路偏逢雨

かくろ 客路 ひとえ 偏に雨に逢い

郷山不入樓

郷山 楼に入らず

故園桃李月

故園 桃李の月

伊水向東流

伊水 東に向って流る

【語釈】

○春愁…春のもの悲しい気持。○百舌…モズ。○五更…夜明けのとき。○客路…旅路。○郷山…故郷（蘇州）の山。○伊水…洛陽を流れる川。

送陸羽

陸羽を送る

皇甫曾

千峯待逋客

千峰 逋客を待つほかく

香茗復叢生

香茗 復た叢生すこうめい そうせい

採摘知深處

採摘 深處を知りさいてき

烟霞羨獨行

煙霞 獨行を羨やむえんか

幽期山寺遠

幽期 山寺遠く

野飯石泉清

野飯 石泉清し

寂寂燃燈夜

寂々たる 燃灯の夜せきせき ねんとう

相思磬一聲

相思う 磬 一声ならんことをけい

【語釈】

○陸羽：復州竟陵（湖北省天門）の人。僧皎然、顔真卿と交流があつた。○逋客：官にならず隠棲する人。○香茗：香りのある茶。○幽期：再会を約した時。○野飯：山間の宿舎での食事。○寂寂：物寂しいさま。○燃燈：灯火。○磬：への字型の樂器。

贈喬尊師

喬尊師に贈る

張 鴻

長忌時人識

長く忌む 時人の識らんことを

有家雲澗深

家有り 雲澗深し

性惟耽嗜酒

性は惟だ 酒を耽嗜す

貧不破除琴

貧なるも 琴を破除せず

靜鼓三通齒

靜に 三通の齒を鼓し

頻湯一味參

頻に 一味の參を湯にす

知師最知我

知んぬ 師の最も我を知るを

相引坐禪陰

相引きて 禪陰に坐せしむ

【語釈】

○喬尊師…不祥。尊師は道士の敬称語。○雲澗…雲のかかっている溪。○耽嗜…耽りたしなむ。○破除…捨てる。○一味參…何も加えない人參。○禪陰…カワヤナギの影。



客中

客中 かくちゆう

于武陵

楚人歌竹枝

楚人 ちくし 竹枝を歌う

遊子涙沾衣

遊子 こらも 涙を沾す

異國久爲客

異国 かく 久しく客と爲り

寒宵頻夢歸

寒宵 しきり 頻に帰るを夢む

一封書未返

一封書 未だ返らず

千樹葉皆飛

千樹葉 皆飛ぶ

南過洞庭水

南洞庭の水を過れば

更應消息稀

更に まご 応に しやうそく 消息稀なるべし

【語釈】

○客中…旅の途中。○楚人…戦国時代の楚の地方（湖北省、湖南省一帯）。○竹枝…民謡の一種。○遊子…さすらい人。○寒宵…寒い夜。○消息…故郷からの便り。○應…「まさにくすべし」と読み、「くすべきである」「くしなければならぬ」との意。

長安春日

長安の春日

曹松

浩浩看花晨

浩浩こうこうたり花あしたを見る晨

六街揚遠塵

六街遠塵を揚ぐ

塵中一丈日

塵中一丈の日

誰是晏眠人

誰あんなか是れ晏眠の人

御柳垂着水

御柳ぎよりゆう垂れて水に着き

野鶯啼破春

野鶯やおう啼いたずらいて春を破る

徒云多失意

徒いたずらに云う失意多しと

猶自惜離秦

猶いまだお自ら秦を離るることを惜しむ

【語釈】

○浩浩…広大なさま。○六街…都大路。○晏眠…遅くまで寝ていること。○御柳…宮中の柳。○秦…長安。

題破山寺後院

破山寺の後院に題す

常建

清晨入古寺

清晨せいしん 古寺に入れば

初日照高林

初日 高林を照す

曲逕通幽處

曲逕きよくけい 幽処に通じ

禪房花木深

禪房 花木深し

山光悅鳥性

山光 鳥性を悦ばしめ

潭影空人心

潭影たんえい 人心を空しうす

萬籟此俱寂

萬籟ばんらい 此れ俱ともに寂じやくなり

但聞鐘磬音

但ただ聞かく鐘磬かねけいの音

【語釈】

○破山寺：興福寺。江蘇省常熟市虞山にある寺。○清晨：日の出前後のすがすがしい朝。○初日：朝日。○幽處：静かな処。○潭影：深い淵の色。○萬籟：風のため諸物が発する音。○磬：へんの字型の楽器。

暮過山村

暮に山村を過ぐ

賈島

數里聞寒水

數里寒水を聞く

山家少四鄰

山家四隣少なし

怪禽啼曠野

怪禽かいきん曠野こうやに啼き

落日恐行人

落日行人を恐れしむ

初月未終夕

初月未だ夕ゆうべを終えず

邊烽不過秦

邊烽へんぽう秦しんを過ぎず

蕭條桑柘外

蕭條しょうじょうたる桑柘そうたくの外ほか

煙火漸相親

煙火えんか漸ようやく相親しむ

【語釈】

○寒水：寒々とした川の流れ。○四鄰：あたり、四辺。○怪禽：怪しげな鳥。○曠野：荒れ野。○行人：旅人。○初月：三日月。○未終夕：夜を待たずに沈む。○邊烽：辺境ののろし。○秦：長安地方。○蕭條：物寂しいさま。○煙火：かまどの炊飯の煙。

(参考文献) 『唐詩選』(吉川幸次郎)

山中道士

山中の道士

賈島

頭髮梳千下

頭髮くしげず梳ること千下せんか

休糧帶瘦容

糧を休やめて瘦容そうようを帶おぶ

養雛成大鶴

雛を養だいいて大鶴だいかくと成し

種子作高松

子みを種みえて高松と作す

白石通宵煮

白石つうしやう通宵煮に

寒泉盡日春

寒泉うすず盡日春く

不曾離隱處

曾なて隱處を離れず

那得世人逢

那なんぞ世人に逢うことを得ん

○千下…多数回。○白石…道士の糧となる白石。○春…白石を粉にするために薄で付く。

贈山中日南僧

山中日南の僧に贈る

張籍

獨向雙峰老

獨り 雙峰そうほうに向つて 老ゆ

松門閉兩涯

松門 兩涯を閉ず

翻經上蕉葉

經きやうを翻えして 蕉葉しやうように上せのぼ

挂衲落藤花

衲を掛けて 藤花を落す

磴石新開井

石たを磴たんで 新たに井せいを開き

穿林自種茶

林うがを穿ちて 自うら茶を種うゆ

時逢海南客

時に 海南かの客かくに逢い

蠻語問誰家

蠻語ばんご 誰が家ぞと問う

【語釈】

○日南：ベトナムの一角。○雙峰：福建省南平市双峰。○向：於いて、場所を表す前置詞。○松門：自然の松を使って作った門。○翻經：お経を翻訳する。○蕉葉：芭蕉の葉、字を書くのに使う。○蠻語：野蛮国の言葉。

田家

田家

章孝標

田家無五行

田家 五行無し

水旱卜蛙聲

水旱すいかん 蛙聲あせいを卜す

牛犢乘春放

牛犢ぎゅうとく 春に乘じて放ち

兒童候暖耕

兒童 暖を候うかがって耕す

池塘煙未歇

池塘 煙未だ歇やまず

桑柘雨初晴

桑柘そうしや 雨 初めて晴る

歲晚香醪熟

歲晚さいばん 香醪こうろう熟し

村村自送迎

村々そんそん 自おのずから送迎す

【語釈】

○五行：五行説による判断。○水旱：水が出るか日照りか。○卜蛙聲：蛙の声で判断する。○牛犢：牛と子牛。○池塘：池。○煙：もや。○桑柘：桑とヤマガワ。○歲晚：年末。○香醪：香りのよい酒。

秦原早望

秦原の早望

章孝標

一忝郷書薦

一たび郷書の薦めを忝かたじけなくせられて

長安未得回

長安未だ回いまかえるを得ず

年光逐渭水

年光渭水を逐い

春色上秦臺

春色秦台しんたいに上る

燕掠平蕪去

燕は平蕪へいぶを掠めて去り

人衝細雨來

人は細雨を衝ついて來る

東風生故里

東風故里に生ずるならん

又過幾花開

又幾花いくかの開くを過ぎん

【語釈】

○秦原：長安の郊外。○早望：朝早くの眺め。○忝郷書薦：科擧の府試（地方試  
験）に受かって、郷試（中央試験）の答案を書くことを許された。○未得回：郷  
試不合格で、長安に留まることができない。○年光：光陰。○渭水：長安の側を  
流れる黄河最大の支流。○春色：春景色。○秦臺：長安の台。○平蕪：原野。



# 前虚後実

雲陽館與韓少卿宿別

雲陽館にて韓少卿と宿別す

司空曙

故人江海別

故人 江海の別れ

幾度隔山川

幾度か 山川を隔つ

乍見翻疑夢

乍たちまちち見て 翻かえつて夢かと疑い

相悲各問年

相悲みて 各おのおの年を問う

孤燈寒照雨

孤燈 寒くして雨を照らし

深竹暗浮煙

深竹 暗くして煙を浮ぶ

更有明朝恨

更に 明朝の恨有り

離杯惜共傳

離杯 共に伝えんことを惜しむ

## 【語釈】

○雲陽館…長安の酒樓。○韓少卿…不祥。○宿別…一宿して別れる。○故人…昔からの友人。○乍見…偶然に出会って。○煙…もや。○離杯…別れの盃。

酬暢當

暢當ちやうとうに酬むくゆ

耿滄

同遊漆沮後

同じく漆沮しつしよに遊びし後

已是十年餘

已に是れ十年余

幾度曾相夢

幾度か曾あつて相夢ゆめむ

何時定得書

何れの時にか定めて書を得ん

月高城影盡

月高くして城影尽き

霜重柳條疎

霜重そくして柳條疎そなり

且對樽前酒

且つ樽前の酒に對して

千般想未如

千般想えども未だ如くならず

【語釈】

○暢當…河東(山西省永濟西)の人。代宗大曆七年(772)の進士。果州の刺史となつた。○漆沮…漆水と沮水 共に陝西省の川。

寄友人

友人に寄す

張 蠟

世道復何如

世道せどう復また何いかん如

東西遠索居

東西とうし遠とくく索居さくきよす

長疑即見面

長ちかくく疑う即もし面を見ると

翻致久無書

翻かえつて久くしく書の無きことを致す

甸麥深藏雉

甸麥でんばく深くして雉を藏し

淮苔淺露魚

淮苔わいたい淺くして魚を露す

相思不我會

相思あいおもども我と會せず

明月幾盈虛

明月めいげつ幾たびか盈えい虚きよす

【語釈】

○世道：世の中の道。○索居：友人と交際せずに孤独でいる。○甸麥：畑に植えた麦。○淮苔：淮水（揚州の北部を繞る川、秦淮）に生える苔。○盈虚：満ちたり欠けたりする。

送喻坦之歸睦州

喻坦之ゆたんしの睦州ぼくしゅうに帰るを送る

李 頻

歸心常共知

歸心 常に共に知る

歸路不相隨

歸路 相したがい随したがわず

彼此無依倚

彼此 依より倚よる無し

東西又別離

東西 又た別離

山花含雨潤

山花 雨うるを含んで潤うるい

江樹逆潮欹

江樹 潮うしおに逆さかって欹そはたつ

莫戀漁樵興

漁樵ぎょしょうの興を恋うる莫かれ

生涯各有爲

生涯 各おのおの 為なすこと有り

【語釈】

○喻坦之：睦州（浙江省建德市）の人。科挙に合格せず、久しく長安に寓居した。

結局舊山に帰って落寞して終わった。李頻の同郷の友人。○歸心：故郷に帰りたいという気持。○漁樵：漁夫と樵。共に隠者を示す。

送李給事歸徐州覲省

李給事が徐州に帰りて覲省するを送る

孫逖

列位登青瑣

位を列して青瑣に登り

還鄉服綵衣

郷に還つて綵衣を服す

共言晨省日

共に言う晨省の日

便是晝遊歸

便ち是れ晝遊して歸る

春水經梁宋

春水 梁宋を經

晴山入海沂

晴山 海沂に入る

莫愁東路遠

東路 遠きを愁うる莫かれ

四牡正駢駢

四牡 正に駢々

【語釈】

○李給事：不祥。給事は天子の身の周りの世話をする官職。○覲省：二親の安否を問いて帰る。○青瑣：宮廷。○服綵衣：周の老萊子は父母を歓ばそうとして五色班闌の衣を付けて、小兒の風をして父母に仕えた。李給事を老萊子になぞらえている。○晨省：早朝父母の安否を尋ねる（礼記）。○晝遊：故郷に錦をかざる。

○梁宋：宋州（河南省商丘市一帯）。○海沂：東海郡（≠山東省臨沂市と江蘇省北部、および安徽省天長市にまたがる地域）と沂州（山東省臨沂市一帯）。○四牡：四頭立ての馬車。○駢駢：馬が走って止まらないさま。

送溧水唐明府

溧水の唐明府を送る

韋應物

三爲百里宰

三たび百里の宰と為りて

已過十餘年

已に過ぐ十余年

祇嘆官如舊

祇だ官の旧の如きを嘆じ

旋聞邑屢遷

旋つて邑の屢遷るを聞く

魚鹽濱海利

魚塩海利に浜し

桑柘傍湖田

桑柘湖田に傍う

到此安民俗

此に到りて民俗を安んぜば

琴堂又晏然

琴堂又た晏然たらん

【語釈】

○溧水：南京市溧水区。○唐明府：不祥。明府は県令。○宰：主。ここでは明府。  
○邑：任地。○魚鹽：魚と塩。海産物。○桑柘：くわとやまぐわ。○湖田：湖の  
ほとりの田。○民俗：人民の習わし。○琴堂：『呂子春秋』に、「宓子賤、禪父  
を治む、琴を弾じ、身堂を下らずして治む。」とあるのに基づく。唐明府を宓子  
賤になぞらえる。○晏然：安定。

送王録事赴虢州

王録事の虢州に赴くを送る

岑 參

早歳即相知

早歳 即ち相知る

嗟君最後時

嗟す 君が最も時に後るることを

青雲仍未達

青雲 仍お 未だ達せず

白髮欲成絲

白髮 糸を成さんと欲す

小店關門樹

小店 関門の樹

長河華岳祠

長河 華岳の祠

弘農民吏待

弘農 民吏待たん

莫使馬行遲

馬行をして 遅からしむる莫かれ

【語釈】

○王録事…不祥。録事は、記録・文簿を司る官職。○虢州…河南省三門峽市靈寶市。○後時…出世が遅い。○青雲…青雲の志。功名を立て立身出世をしようとす  
る心。○關門…函谷関。○長河…黄河。○華岳祠…五嶽の一つである華山にある  
嶽定を祀る祠。○弘農…弘農郡、河南省西部に位置する三門峽市・南陽市西部及  
び陝西省商洛市した。○民吏…官吏。

別鄭礪

鄭礪ていぎに別る

郎士元

暮蟬不可聽

暮蟬ぼせん 聴くべからず

落葉豈堪聞

落葉あ 豈に聞くに堪えんや

共是悲秋客

共かに是れ 悲秋の客かく

那知此路分

那なんぞ知らん 此の路より分れんとは

荒城背流水

荒城 流水に背き

遠鴈入寒雲

遠鴈 寒雲に入る

陶令門前菊

陶令とうれい 門前の菊

餘花可贈君

余花 君に贈るべし

【語釈】

○鄭礪…不祥。○荒城…荒れた九江郡（江西省北部）の街、江水を背にして立つ。  
○陶令…陶淵明。陶淵明の故里は栗里といい、九江郡にある。



送韓司直

韓司直かんしちやくを送る

皇甫冉

遊吳還適越

吳に遊び還また越ゆに適かん

來往任風波

來往 風波に任す

復送王孫去

復また王孫まの去るを送り

其如春草何

其れ 春草いかん如何

山明殘雪在

山明かにして 殘雪在り

潮滿夕陽多

潮滿せきようちて夕陽多し

季子留遺廟

季子きし 遺廟いびようを留む

停舟試一過

舟を停めて 試こころみに一たび過よぎれ

【語釈】

○韓司直…不祥。司直は裁判官。○吳・越…春秋時代の吳と越の地方。○王孫…貴公子。《楚辭 淮南小山〈招隱士〉》：“王孫遊兮不歸 春草生兮萋萋。”を踏まえる。ここでは、韓司直のこと。○如く何…く如何（いかん）と訓読し、くはどうであろうかの意。○季子…春秋時代の吳の李札。吳の初代王寿夢の少子。清廉賢哲を以って知られ、延陵季子として知られる。○遺廟…李札の廟は江蘇省蘇州市にある。○過…訪れる。

途中送權曙

途中 權曙を送る

皇甫冉

淮海風濤起

淮海 風濤起り

江關幽思長

江關 幽思長し

同悲鵲遶樹

同じく悲しむ 鵲の樹を遶るを

獨作雁隨陽

独り作す 雁の陽に隨うを

山晚雲和雪

山晩れて 雲雪に和し

天寒月照霜

天寒くして 月霜を照す

由來濯纓處

由来 纓を濯いし処

漁父愛滄浪

漁父 滄浪を愛す

【語釈】

○權曙：權と曙の二人、不祥。○淮海：淮水と海の畔の地方。○風濤：風波と安史の乱。○江關：湖北省枝城市の荊門と宜昌県の虎牙二山に長江が挟まれたところ。○幽思：心閑に思いやること。○鵲遶樹：曹操詩・短歌行「月明星稀 烏鵲南飛。繞樹三匝 何枝可依。」身寄りのないこと。○雁隨陽：「鴻雁の属は陽に従う」『尚書』 知る物があつてそちらに行く。○濯纓處：「滄浪之水清兮 可以濯我纓」『楚辭・漁父辭』即ち 屈原が漁父辭を作った滄浪水（漢陽郡の川）。○漁父愛滄浪：纓が清いから。

酬普選二上人

普選二上人に酬ゆ

嚴維

本意宿東林

本意おもう 東林に宿せんことを

因聽子賤琴

因よりて聽く 子賤しせんの琴

遙知大小朗

遙はるかに知る 大小らうの朗

已斷去來心

已きよに斷つ 去來きよらうの心

夜靜溪聲近

夜靜かにして 溪聲近く

庭寒月色深

庭寒くして 月色深し

寧知塵外意

寧なんぞ知らんや 塵外の意

定後更成吟

定まりて後 更に吟を成さんとは

【語釈】

○普選：普と選の二人、不祥。○本意：本来の意思。○東林：廬山の名刹、東林寺。○子賤琴：『呂子春秋』に、「宓子賤、禪父を治む、琴を弾じ、身堂を下らずして治む。」とあるのに基づく。上人の玄話を聴くの意。○大小朗：晉の恵朗禪師を大朗、振朗禪師を小朗という。普選二上人をなぞらえる。○去來：過去と未來。○塵外意：日常生活に關しない意思。

送鄭宥入蜀

鄭宥ていゆうの蜀に入るを送る

李端

寧親西陟險

親を寧やすんじて 西のかた險のほを陟る

君去異王陽

君去りて 王陽おうように異る

在世誰非客

世に在りて 誰か客あひに非ざる

還家即是鄉

家に還れば 即ち是れ郷

劍門千轉盡

劍門 千轉せん盡き

巴水一支長

巴水 一支いち長ながし

請語愁猿道

請いう 愁猿しゆいんに語りて道みちえ

無煩促淚行

煩わづらわしく淚行るいこうを促せまさしむるなかれと

【語釈】

○鄭宥…不祥。○寧…安心させる。○王陽…前漢の人、益州蜀の刺史となって車を驅つて蜀の天險に到ったときに、父母があるため、身を傷つけることを畏れて車を返した。○千轉…道の曲がることが数多いさま。○一支…一筋。○劍門…四川省廣元市劍門 蜀道の難所。○巴水…巴蜀を流れる川。○愁猿…悲しそうに鳴く猿。

杭州郡齋南亭

杭州の郡齋ぐんさいの南亭

姚合

符印懸腰下

符印ふいん 腰下ようかに懸け

東山不得歸

東山 帰るを得ず

獨行南北近

独り行けば 南北近し

漸老往還稀

漸く老いて 往還稀なり

迸筍侵窗長

迸筍ほうじゆん 窓を侵して長く

驚蟬出樹飛

驚蟬きようせん 樹を出て飛ぶ

田田池上葉

田々でんでん 池上の葉

長是使君衣

長く是れ 使君の衣

【語釈】

○郡齋：郡の長官の宿舎。○符印：割り符。○東山不得歸：東晋の謝安は、若い頃は出仕せずに妓女を携えて東山に登って遊んだが 官吏の身としてはそのまねは出来ない。○迸筍：勢いよいタケノコ。○長：生長する。○田田：田の池。○使君：刺史。

日東病僧

日東の病僧

項斯

雲水絶歸路

雲水 帰路を絶つた

來時風送船

來時 風 船を送る

不言身後事

言わず 身後の事

猶坐病中禪

猶お坐す 病中の禪

深壁藏燈影

深壁 灯影を藏し

空窗出艾煙

空窓 艾煙かいえんを出すいだ

已無郷土夢

已に 郷土の夢無く

起塔寺門前

塔を起つ 寺門の前

【語釈】

○日東…日本。○雲水…雲水万里、道が遠いこと。○艾煙…灸の藻草の煙。○塔…墓。

送友人下第歸覲

友人の下第して歸覲するを送る

劉得仁

君此卜行日

君は此こゝに行日を卜す

高堂應夢歸

高堂まへ 応に帰るを夢むべし

莫將和氏淚

和氏が涙を將もつて

滴著老萊衣

老萊が衣ろららいに滴著てまひやくすること莫かれ

嶽雨連河細

岳雨河に連なりて細く

田禽出麥飛

田禽でんきん 麦を出て飛ぶ

到家調膳後

家に到りて調膳の後

吟好送斜暉

吟じて好し斜暉しやきを送るに

【語釈】

○歸覲…帰って両親に謁する。○卜行日…占って出発の日を定める。○高堂…父母。○應…「まさにくすべし」と読み、「きつとくであるう」の意。○和氏淚…和氏の璧」の故事。○老萊衣…「老萊子」の故事。○斜暉…夕陽。

南遊有感

南遊して感有り

于武陵

杜陵無厚業

杜陵 厚業無し

不得駐車輪

車輪を駐とどむることを得ず

重到曾遊處

重ねて 曾遊そうゆうの処に到れば

多非舊主人

多くは 旧主人きゆうしゆじんに非ず

東風千里樹

東風 千里の樹

西日一洲蘋

西日 一洲ひんの蘋

又渡湘江去

又湘江を渡りて去れば

湘江水復春

湘江水 復また春なり

【語釈】

○杜陵：長安の地の地名、作者の故郷。○厚業：大きな財産。○曾遊處：曾てあるんだ処。○蘋：浮き草。○広西省に流入し湖南省に入る川、湖南省で最大の河流。



春早寄華下同志

春早 華下の同志に寄す

裴 説

正是花時節

正に是れ花時の節

思君寢復興

君を思いいて寝いて復また興おく

市沽終不醉

市沽終しこつに酔つわず

春夢亦無憑

春夢も亦よた憑よる無し

嶽面懸青雨

岳面 青雨を懸かけ

河心走濁氷

河心 濁氷を走はらず

東門一條路

東門 一条みちの路

離恨正相仍

離恨りこん 正あいに相い仍よる

【語釈】

○華下…都下、長安。○市沽…市販の酒。○嶽面…高い山（華山？）の面。○青雨…煙雨、こぬか雨。○離恨…別れの恨み。

途中別孫璐

途中にて孫璐そんろに別る

方干

道路本無限

道路本もと限り無し

又應何處逢

又また応に何れの処にて逢うべき

流年莫虚擲

流年むな虚しく擲なげうつ莫れ

華髮不相容

華髮かはつ相容あいゆるさず

野渡波搖月

野渡やと波月を揺がし

寒城雨翳鐘

寒城雨鐘を翳えいず

此心隨去馬

此の心去馬に随つて

迢遞過重峰

迢遞ちようてい重峰を過ぎん

【語釈】

○孫璐…不祥。○流年…流水の如く流れ行く年月。○華髮…白髮頭。○野渡…野にある渡し場。○寒城…冬の城。○翳…覆い隠す。○去馬…去つて行く馬。○迢遞…遙かで遠いさま。○重峰…重なり合う山。

送友及第歸浙東

友の及第して浙東に帰るを送る

方干

南行無俗侶

南行 俗侶無しぞくりよ

秋鴈與寒雲

秋鴈と寒雲と

野趣自多愜

野趣 自ら多くは愜かなう

名香人共聞

名香 人 共に聞く

吳山中路斷

吳山 中路より断え

浙水半江分

浙水 半江分る

此地登臨慣

此の地 登臨して慣なる

含情一送君

情を含みて 一いっに君を送る

【語釈】

○浙東…浙江省杭州市。○俗侶…俗世間の友達。○野趣…山野の情味。○愜…心にかなう。○聞…匂いを嗅ぐ。○吳山…春秋時代の呉の地方の山。○浙水…浙水、錢唐江、杭州地方を流れる川。○登臨…高いところ登って下方を眺める。

春宮

春宮

杜荀鶴

早被嬋娟誤

つと 嬋娟に誤まれて

欲妝臨鏡慵

よそお 妝わんと欲して 鏡に臨みて慵し

承恩不在貌

恩を承るは 貌に在らず

教妾若爲容

妾をして 若為か容つくらしむ

風暖鳥聲碎

風暖かにして 鳥声碎け

日高花影重

日高くして 花影重し

年年越溪女

年々 溪を越える女

相憶採芙蓉

相憶いて 芙蓉を採む

【語釈】

○春宮：春宮怨、恩寵を受けられない宮女の怨みを述べた詩。○嬋娟：あでやかで美しいさま。○貌：容貌。○若爲：「若何」に同じ、どのようにして。

辭崔尚書

崔尚書を辞すさいしょうしょ

李 頗

一飯仍難受

一飯仍お受け難しな

淹留已半年

淹留 已に半年えんりゅう

終期身可報

終に身の報すべきを期すついに

不擬骨空鑿

骨空しく鑿るを擬せずえ

城晚風高角

城晩れて風角を高くしかく

江春浪起船

江春にして浪船を起す

曾同棲止地

曾て同じく棲止せし地かつ

獨去塞鴻前

独り去る 塞鴻の前さいこう

【語釈】

○辭…(家から) 離れる。○崔尚書…不祥。尚書は尚書郎(詔勅を司る官)。○淹留…久しく留まること。○骨…自分の心骨。○鑿…恩を記す。○角…角笛。○棲止…住む。寄食する。○塞鴻…塞上を通り過ぎる雁。

下方

下方

司空圖

三十年來往

三十年來往す

中間京洛塵

中間京洛の塵けいろく

倦行今白首

倦行今白首けんこう

歸臥已清神

歸臥已に清神きが

春暖冬生笋

春暖つみかにして冬たけのこ笋を生じ

松涼夏健人

松涼しくして夏人を健にす

更慚徵詔起

更に慚はず徵詔ちようしやうせられて起つて

避世迹非真

世を避けて迹また真に非ざるを

【語釈】

○下方…穢土、仏教用語。ここでは、中條山のふもと(司空圖の住居)と掛ける。

○來往…慌ただしく過ごすこと。○京洛…都。○倦行…人事に倦むこと。○白首

…白髪頭。○歸臥…官職を辞めて家に帰つて静かに過ごすこと。○清神…精神の

清浄なさま。○徵詔…詔により官吏となること。

華下送文浦涓

華下かかにて 文浦涓ぶんほけんを送る

司空圖

郊居謝名利

郊居 名利を謝す

何事最相親

何事なにじぞ 最も相親しむ

漸與論詩久

漸ようやく 与ともに詩を論ずること久し

皆知得句新

皆知る 句を得ること新たなるを

川明虹照雨

川明かにして 虹雨を照らし

樹密鳥衝人

樹密にして 鳥人を衝く

應念從今去

應まさに念おもうべし 今よ従り去りて

還來嶽下頻

還また 岳下しきりに来ること頻なるを

【語釈】

○華下…ここでは華陰県(陝西省同州府)。○郊居…田舎の家。○謝…謝絶する。

○漸…しだいしだいに。○應…「まさにしすべし」と読み、「しすべきである」

「しすなければならぬ」の意。

遊東林寺

東林寺に遊ぶ

黄滔

平生愛山水

平生へいせい 山水を愛す

下馬虎溪時

馬を虎溪こけいに下す時

已到終嫌晚

已いに到りて 終つひに晚おそきことを嫌いやい

重遊預作期

重遊ちようゆう 預あらかじめ期なを作す

寺寒三伏雨

寺は寒さむし 三伏さんぷくの雨

松偃數朝枝

松は偃ふす 數朝の枝

翻譯如曾見

翻譯 曾かつて見るが如し

白蓮開舊池

白蓮 旧池きうちに開く

【語釈】

○東林寺：江西省九江市の南、廬山にある名刹。○平生：常日頃。○虎溪：東林寺の前にある溪。○重遊：重ねて（ここに来て）遊ぶ。○三伏：初伏、中伏、末伏。夏の一番暑いとき。○偃：地に横たわる。○數朝：東晉から唐までの時代。長い年月。○翻譯：南宋の高僧が經本を翻譯した翻譯臺。



送僧還南嶽

僧の南岳かえに還るを送る

周賀

辭僧下水棚

僧に辭して水棚すいぼうを下る

因聽嶽鐘聲

因よりて聽く嶽鐘がくしょうの聲

遠路獨歸寺

遠路たいろ獨り寺に歸る

幾時重到城

幾時いっか重ねて城に到らん

風高寒葉落

風高くして寒葉落ち

雨絶夜堂清

雨絶絶えて夜堂清し

自説深居後

自みづから説く深居の後

隣州亦不行

隣州りんしゅう亦また行かじと

【語釈】

○南嶽…五岳の一つである衡山。○辭僧…周賀は曾て僧侶であったので、同侶の僧に別れを告げるの意。○城…俗世間の街。○深居…下界と接触無く住むこと。○隣州…となり（近くの）州。

送人遊蜀

人の蜀に遊ぶを送る

馬 戴

別離楊柳陌

別離 楊柳の陌ちまた

迢遰蜀門行

迢遰ちようていたり 蜀門こくの行

若聽清猿後

若しくは清猿せいえんを聴いて後

應多白髮生

応まさに 多くは白髮生まずべし

虹霓侵棧道

虹霓こうげい 棧道さんどうを侵し

雨雪雜江聲

雨雪 江聲まじを雜まじう

過盡愁人處

人を愁えしむる処を 過ぎ尽くさば

煙花是錦城

煙花 是れ 錦城

【語釈】

○陌：街路。○迢遰：遙かに遠い。○蜀門：蜀への径には山が重なり門のようである。○清猿：清い猿の声。○虹霓：虹。○棧道：崖に穴を空けて木を差し込んでその上に架けた道。○愁人處：山峡の猿の鳴き声がする所。○煙花：花霞。○錦城：錦官城（成都）。

經周處士故居

周處士の故居を經

方干

愁吟與獨行

愁吟しゆうぎんと獨行と

何事不關情

何事ぞ情こころに關らざらん

久立釣魚處

久しく釣魚ちようぎよの処ところに立てば

唯聞啼鳥聲

唯だ啼鳥ていちようの聲こゑを聞く

山蔬和雨歇

山蔬さんそ雨あめに和なして歇やみ

海樹入籬生

海樹籬うみじに入いつて生なず

吾在茲溪上

吾わが茲こゝの溪上せきじやうに在ありて

懷君恨不平

君きみを懷おもいて恨うらみ平なかならず

【語釈】

○經：經過する。○周處士：不祥。處士は官に仕えない人。○故居：昔の住まい。  
○山蔬：山中の野菜。○歇：無くなる。○海樹：海辺の樹木。

送人歸山

人の山に帰るを送る

石 召

相逢唯道在

相逢いて唯道のみ在り

誰不共知貧

誰か共に貧しきことを知らざらん

歸路分殘雨

歸路 殘雨を分ち

停舟別故人

舟を停めて 故人に別る

霜明松嶺曉

霜は明なり 松嶺の曉

花暗竹房春

花は暗し竹房の春

亦有棲閑意

亦た 棲閑の意有り

何年可寄身

何れの年にか 身を寄すべき

【語釈】

○道…人の習得すべき大道。○分…分かち合う。○故人…古くからの友人。○棲

閑…静かに生活する。

送友人歸宜春

友人の宜春に帰るを送る

張喬

落花兼柳絮

落花と柳絮と

無處不紛無

処として紛々ふんぷんならざるは無し

遠道空歸去

遠道えんどう空しく帰り去る

流鶯獨自聞

流鶯りゅうおう獨自ひとり聞かん

野橋喧碓水

野橋うす碓かまびすに喧しき水

山郭入樓雲

山郭楼に入る雲

故里南陵曲

故里南陵の曲くま

秋期更送君

秋期更に君を送らん

【語釈】

○紛紛：一面に乱れ飛ぶさま。○遠道：遙かな道。○流鶯：流れ飛ぶ鶯の声。○野橋：野原の中の橋。○獨自：ひとり、二字でひとり、と読む。○碓：ここでは水の流れを利用して突く碓。○山郭：山の街。○故里：故郷。○南陵：安徽省南陵県。○曲：一部落。○秋期：秋賦（地方より科挙に人を送ること）。

秋日別王長史

秋日 王長史に別る

王 勃

別路千餘里

別路 千余里

深恩重百年

深恩 百年に重し

正悲西候日

正まさに悲しむ 西候の日

更動北梁篇

更まに動はく 北梁ほくりようの篇へん

野色籠寒霧

野色 寒霧かんむを籠こめ

山光斂暮煙

山光 暮煙ぼえんを斂おさむ

終知難再奉

終つひに 再び奉じ難きを知り

懷德自潛然

德おもを懷おもいて 自おのずから潛さんぜん然

【語釈】

○王長史：未詳、長史は官名、司馬に相当。○西候：秋。○北梁篇：別れの詩賦。  
○野色：野原の景色。○寒霧：冷ややかな霧。○山光：山の上の夕日。○暮煙：  
夕暮れの靄。○潛然：涙の流れるさま。さめざめ。

汝墳別業

汝墳じよかんの別業

祖詠

失路農爲業

路を失いて 農を業と為す

移家到汝墳

家を移して 汝墳じよかんに到る

獨愁常廢卷

獨り愁う 常に卷を廢するを

多病久離羣

多病 久しく群を離る

鳥雀垂窓柳

鳥雀 窓に垂るる柳

虹霓出澗雲

虹霓こうげい澗たにを出ずる雲

山中無外事

山中 外事がいじ無し

樵唱有時間

樵唱しょうしょう 時に聞く有り

【語釈】

汝墳：安徽省阜陽県。別業：別荘。失路：人生行路に行き悩むこと。廢卷：書物  
を読まなくなった。虹霓：にじ。澗：谷川。外事：身辺を取り巻く雑事。樵唱：  
樵の歌。

宣州使院別韋忠物

宣州の使院にて韋忠物に別る

劉長卿

白雲乖始願

白雲 始願しがんに乖そむく

滄海有微波

滄海そうかい 微波びは有り

戀舊爭趨府

旧したを恋したいて争はしいて府はしに趨はしり

臨危欲負戈

危ほこに臨ほこみて 戈ほこを負ほこわんと欲ほこす

春歸花殿暗

春はは 花殿はなに歸はりて暗く

秋傍竹房多

秋はは 竹房ちくぼうに傍そいて多し

耐可機心息

機心かんの 息やむべきに耐たえたり

其如羽檄何

其れ 羽檄うげきを如何いかんせん

【語釈】

○宣州：安徽省宣城市宣州区。○使院：節度使の役所。○始願：最初の願望。○舊：旧友である韋忠物。○爭趨府：急いで節度使の幕府を訪問する。○危：安史の乱。○機心：いつわり巧む心。榮達しようとする心。○羽檄：軍中の命令書。



又送陸潜夫茅山尋友

又陸潜夫りくせんふが茅山ちざんに友を尋ぬるを送る

皇甫冉

登山自補履

山に登りて 自ら履みずかを補おぎなう

訪友不齋糧

友を訪といて 糧もちを齋さらさず

坐歇青松晚

坐まに歇やすう 青松せいそうの晚くれ

行吟白日長

行吟ぎやういんすれば 白日はくじつ長ながし

人烟隔水見

人煙にんえん水を隔へてて見え

草氣入林香

草氣そうき林りんに入りて香かほし

誰作招尋侶

誰たれか 招尋しょうじんの侶りよと作りて

清齋宿紫陽

清齋せいさいして 紫陽しやうに宿とどせん

【語釈】

○陸潜夫…不祥。潜夫は隱者。○補履…折れた木履（齒の付いた下駄）の齒を繕う。○齋糧…金錢を持って行く。○人煙…人家の炊煙。○招尋…人を招く。○侶…複数の友。○清齋…肉食せず、清泉を飲む。○紫陽…紫陽觀、延陵（江蘇省常州）にあった道教の寺。

夏夜西亭即事

夏夜西亭即事

耿滄

高亭賓客散

高亭 賓客散ひんかくず

暑夜最相和

暑夜 最も相和あいわす

細汗凝衣集

細汗 衣に凝りて集まり

微涼待扇過

微涼 扇を待ちて過ぐ

風還池色定

風 還りて 池色定まりかえ

月晚樹陰多

月 晚くして 樹陰多しおそ

遙想隨行者

遙かに想う 行に隨う者

珊珊動曉珂

珊珊さんさんとして 曉珂ぎょうがを動ぜしことを

【語釈】

○賓客…ここでは錢記のこと。○即事…事に触れてその場のことを題材にして作った詩。○相和…此処では、暑気の甚だしいこと。○風還…風が無くなること。○隨行者…宮城に行く者。○珊珊…佩玉（腰に付けるおび玉）の鳴る音。

庭春

庭春

姚合

塵中主印吏

塵中主印の吏

誰遣有高情

誰か高情有らしむ

趁煖簷前坐

だんお  
煖を趁いて 簷前に坐し

尋芳樹底行

ほう  
芳を尋ねて 樹底に行く

土融凝野色

土融けて 野色凝り

冰敗滿池聲

冰敗れて 池声満つ

漸覺春相泥

ようや  
漸く覚ゆ 春の相泥むことを

朝來睡不輕

ちようらい  
朝來 睡 軽からず

【語釈】

○塵中…俗世間。○主印吏…印判を司る官。○趁…求める。○簷前…のきさき。  
○野色…野の景色。○漸…しだいしだいに。○凝…形成する。○泥…まとわりつ  
く↓定着する。

新春

新春

姚合

官卑長少事

官卑いやしくして長く事こと少なし

縣僻又無城

縣僻へきにして又た城しろ無し

未曉衝寒起

未だ曉あげざるに寒かぜを衝つきて起き

迎春忍病行

春はるを迎えて病やまを忍しのびて行く

樹枝風掉軟

樹枝じゆ 風かぜ 掉はいて軟なかく

菜甲土浮輕

菜甲さいこう 土つちに浮うんで輕かろし

最好林間鶴

最もも好こし 林間りんかんの鶴つる

今朝足喜聲

今朝けさ 喜聲おほ足あしし

【語釈】

○僻…辺鄙。○掉…震える、揺れる。○菜甲…草や蔬菜の芽。○足…多い。

晩春答嚴少尹與諸公見過晩 王維

晩春 嚴少尹げんしょういと諸公しよこうの過よらるるに答こたう

松菊荒三徑 松菊 三徑さんけいに荒る

圖書共五車 圖書 共に五車

烹葵邀上客 葵きを烹にて 上客じやうかくを邀むかえ

看竹到貧家 竹を看みて 貧家ひんかに到いたる

雀乳先春草 雀乳じやくにゅう 春草しゆんそうに先まだち

鶯啼過落花 鶯啼ういいて 落花らくわを過すぐ

自憐黃髮暮 自ら憐あはれむ 黃髮わうはつの暮ゆふ

一倍惜年華 一倍 年華ねんわを惜おぼしむことを

【語釈】

○嚴少尹…不祥。○府の長官の次官。○松菊…松と 寒さに耐えた菊。「松菊猶存」の陶淵明の詩を借用して、嚴少尹を陶淵明になぞらえる。○葵…オアイ菜、貧者の食べ物。○雀乳…子に乳をやる雀。○黃髮…白髮と同じく老人。王維自身。○年華…歲月。

送王正字山寺讀書

王正字が山寺にて読書するを送る

李嘉祐

欲究先儒教

先儒の教を究めんとして

還過支遁居

還つて支遁の居を過ぐ

山塔閑聽法

山塔閑に法を聴き

竹寺獨看書

竹寺獨り書を見る

向日荷新卷

日に向つて荷新たに卷き

迎秋柳半疎

秋を迎えて柳半ば疎なり

風流有佳句

風流佳句有り

不似帶經鋤

經を帯びて鋤くには似ず

【語釈】

○王正字…不祥。○先儒…先賢の儒者。○支遁…東晉の僧、王羲之、謝安と交流があった。○山塔…山家のきざはし。○荷…蓮の葉。○帶經…經書を読む。○鋤…農作業をする。

秋日過徐氏園林

秋日徐氏の園林に過ぎる

包 佶

回塘分越水

回塘 越水を分ち

古樹積吳煙

古樹 吳煙を積む

掃竹催鋪席

掃竹 席を鋪くを催し

垂蘿待繫船

垂蘿 船を繫ぐを待つ

鳥窺新罇栗

鳥は窺う 新罇の栗

龜上半敬蓮

龜は上る 半敬の蓮

屢入忘歸地

屢ば 忘歸の地に入る

長嗟俗事牽

長嗟す 俗事に牽かるることを

【語釈】

○過…訪れる。○徐氏…不祥。○回塘…曲がっている隄。○越水…越の地方の川。  
○吳煙…越の地方に見える靄。○掃竹…塵気を払う竹。○垂蘿…垂れ下がって  
る藤。○新罇…皮のむけた。○長嗟…歎く。

灞東司馬郊園

灞東はとうの司馬の郊園

許渾

楚翁秦塞住

楚翁そおう秦塞しんさいに住す

昔事李輕車

昔事つかう李輕車りけいしゃ

白社貧思橘

白社はくしゃ貧ひんしくして橘きつを思い

青門老種瓜

青門せいもん老らういて瓜うりを種くわう

讀書三徑草

讀書とくしょ三徑さんけいの草

沽酒一籬花

沽酒こしゅ一籬いちりの花

更欲尋芝朮

更さらに芝朮しじゆつを尋ねんと欲す

商山便寄家

商山しょうざん便すなわち家を寄せん

【語釈】

○灞東…長安の地名。○司馬…刺史の補佐官。○楚翁…楚の生まれの老人。○秦塞…灞東。○李輕車…李広の弟の李蔡。大將軍衛青に従つて軍功があり、輕車將軍となつた。司馬をなぞらえる。○白社…洪州（江西省南昌市一帯）。○青門…漢陽城の東門。○沽酒…市販の酒。○芝朮…芝は靈芝、朮は白朮、共に藥草。○商山…商山四皓のこと。



下第寓居崇聖寺感事 下第し崇聖寺に寓居し事に感ず

許 渾

懷玉泣京華

玉を懷いて 京華に泣き

舊山歸路賒

旧山 歸路賒なり

靜依禪客院

靜に 禪客の院に依りて

幽學野人家

幽に 野人の家に学ぶ

林晚鳥爭樹

林晚れて 鳥樹を争い

園春蝶護花

園春にして 蝶花を護る

東門有閑地

東門に 閑地有り

誰種邵平瓜

誰か 邵平の瓜を種えん

【語釈】

○下第…科挙に不合格となること。○寓居…仮住まい。○崇聖寺…雲南省大理市の郊外にある寺。○土…故郷。○京華…京城（長安）の美称。○舊山…故郷の山。○靜…静寂。○依…求める。禪客院…座禅をする僧院。○幽…幽趣。○野人…農夫。○閑地…空き地。○邵平瓜…秦の東陵侯であった招平は、秦が滅んでから長安城の東門に瓜を植えて暮らしたという故事、帰農の生活に甘んじること。

（参考文献）『唐詩選』吉川幸次郎編

寄山中高逸人

山中の高逸人に寄す

孟 貫

煙霞多放曠

煙霞 多くは放曠

吟嘯是尋尋

吟嘯 是れ尋常

猿共摘山果

猿と共に 山果を摘み

僧鄰住石房

僧に隣りて 石房に住す

躡雲雙屐冷

雲を躡んで 双屐冷やかに

採藥一身香

藥を採りて 一身香し

我憶相逢夜

我は憶う 相逢いし夜

松潭月色涼

松潭 月色涼しかりしことを

【語釈】

○高逸人：高潔なる隱棲人。○煙霞：靄と霞。○放曠：からりと開けて束縛のないこと。○吟嘯：詩を吟ずる。○雙屐：ふたつのあしだ。○松潭：松の茂る淵。

贈盧嶽隱者

いおりだけ  
盧岳の隱者に贈る

杜荀鶴

說見來此居

みるならく  
說見 来りて此に居り

未嘗離洞門

未だ嘗つて 洞門を離れずと

結茅遮雨結

かや  
茅を結んで 雨結を遮け

採藥給晨昏

薬を採りて 晨昏に給す

古樹藤纏殺

まじ  
古樹藤纏いて殺し

春泉鹿過渾

じゆ  
春泉鹿過ぎて渾る

悠悠無一事

悠悠として 一事無く

不似屬乾坤

乾坤に属すに似ず

【語釈】

○盧嶽：廬山。江西省九江市南部にある名山。○說見：見る。○茅：茅屋。茅草  
きの粗末な家。○晨昏：朝晩。○悠悠：のんびり、ゆったりしたさま。○乾坤：  
天地。

寄司空圖

司空圖しこうとに寄す

僧虛中

逍遙短褐成

逍遙しょうよう短褐たんかつ成る

一劒動精靈

一劒精靈を動かす

白晝夢仙島

白晝はくしつ仙島を夢み

清晨禮道經

清晨せいしん道經どうきようを礼す

黍苗侵野徑

黍苗しよびよう野徑を侵し

桑椹汚閑庭

桑椹そうしん閑庭かんていを汚す

肯要爲隣肯

肯とえて隣となりを為す者を要せんや

西南太華青

西南たいか太華青し

【語釈】

○司空圖：唐末の詩人。○逍遙：さまよい歩く。○短褐：短い毛布の服。賤者の着する服。○精靈：神鬼。神仙。○仙島：仙人の住む海の島。○清晨：日の出の前の時間。○桑椹：桑の実。○太華：華山。陝西省華陰市にある山。五岳のひとつ。

送成州程使君赴

成州程使君の赴くを送る

岑 參

程侯新出守

程侯 新たに出て守たり

好日發行軍

好日 行軍を発す

拜命時人羨

命を拝して 時人羨やみ

能官聖主聞

官を能くして 聖主聞く

江樓黑寒雨

江樓 寒雨黒く

山郭冷秋雲

山郭 秋雲冷なり

竹馬諸童子

竹馬の諸童子

朝朝待使君

朝々 使君を待つ

【語釈】

○成州：甘肅省隴南市北部。○程使君：不祥。使君は刺史。○程侯：程使君。○山郭：山里。○朝朝：每朝。

漢陽即事

漢陽即事 かんようそくじ

儲光羲

楚國千里遠

楚國千里遠し

孰知方寸違

孰たれか知らん 方寸の違うことを

春遊歡有客

春遊 有客を歡び

夕寢賦無衣

夕寢せきしん 無衣を賦ふす

江水帶冰綠

江水 氷を帯びて緑に

桃花隨雨飛

桃花 雨に随つて飛ぶ

九歌有深意

九歌 深意有り

捐佩乃言歸

佩を捐すなわてて 乃ち言に帰らん

【語釈】

○漢陽：湖北省武漢市漢陽区。○即事：事に触れてその場のことを詠った詩。○

楚國：春秋時代の楚の国の地方。ここでは、漢陽。○方寸：心。意思。○九歌：

屈原の作った詩の一つ。○佩：官吏が腰に付けるおびたま。官吏。○言歸：故郷

に帰る。

酬劉員外見寄

劉員外りゆういんがいが寄よせらるるに酬むくゆ

嚴維

蘇耽佐郡時

蘇耽そたん 郡ぐんに佐さたる時

近出白雲司

近しごろ 白雲しの司しより出いず

藥補清羸疾

藥くすりは 清羸せいゑいの疾やまいを補まい

窗吟絕妙詞

窓まどには 絶妙ぜつめうの詞しを吟うたはず

柳塘春水漫

柳塘りゆうたう 春水はるみづ漫まん

花塢夕陽遲

花塢かお 夕陽ゆふやう遲おそい

欲識懷君意

君きみを懷こうの 意いを識しらんと欲ほせば

朝朝訪檝師

朝々ちようちよう 檝師しゅうしに訪とえ

【語釈】

○劉員外：中唐の詩人劉長卿。○蘇耽：伝説中の仙人。裁判官となったことがある。劉員外をなぞらえる。○佐：補佐官。○白雲司：刑部の官吏。○清羸：痩せ  
疲れること。○朝朝：毎朝。○檝師：船頭。○訪：問う。

別至弘上人

至弘上人しこうしようにんに別る

巖 維

最稱弘偃少

最も称す 弘偃こうえん少しと

早歳草茆居

早歳より 草茆そうぼうに居す

年老從僧律

年老いて 僧律そうりつに従い

生知解佛書

生知せいち 仏書ぶつしよを解す

衲衣求壞帛

衲衣のうえ 壞帛えはくを求め

野飯拾春蔬

野飯のうはん 春蔬しゆんそを拾う

章句無求斷

章句 求斷きゆうだん無し

時中學有餘

時中 学余がくじより有り

【語釈】

○至弘上人…不祥。○弘偃…行、住、坐、臥の行のうち臥。○草茆…在野、寺でない民間家。○生知…うまれながらの知恵。○衲衣…布の着物、人の使わない布をつなぎ合わせた粗末な着物。○壞帛…土の如くに染まったもの。○野飯…粗末な食事。○春蔬…春の野菜。○章句…文章の句。○求斷…判断を求め。○時中…時に従い変に応じてよろしきをえること。



送王牧往吉州謁使君叔

李嘉祐

王牧の吉州に往きて使君叔に謁するを送る

細草綠汀洲

細草汀洲に緑なり

王孫耐薄遊

王孫薄遊に耐えたり

年華初冠帶

年華初めて冠帶す

文彩舊弓裘

文彩旧弓裘

野渡花爭發

野渡花争い發き

春塘水亂流

春塘水乱れ流る

使君憐小阮

使君小阮を憐れむとも

應念倚門愁

応に倚門の愁いを念すべし

【語釈】

○王牧：不祥。○吉州：江西省吉安市。○使君叔：王牧の叔父で吉州刺史。○汀洲：中洲。○王孫：貴公子。王牧のこと。《楚辭・淮南小山〈招隱士〉》：“王孫遊兮不歸 春草生兮萋萋。”○薄遊：ここ（吉州）を旅行すること。○文彩：立派なこと。○年華：若い年頃。○冠帶：冠と帯を着ける日本の元服。○文彩：立派なこと。○弓裘：莊子「弓人の子は先ず裘を作ることを学ぶ」、父や叔父の後を継ぐこと。○野渡：野原の渡し。○春塘：春の隄。○使君：使君叔。○小阮：晉の阮咸、阮籍が叔父であったので、王牧を阮咸、使君叔を阮籍になぞらえる。○應：「まさにくすべし」と読み、「くすべきである」「くしなければならぬ」の意。○倚門愁：《戰國策》卷十三《齊策六》王孫賈年十五 事閔王。王出走 失王之處。其母曰：「女朝出而晚來 則吾倚門而望・女暮出而不還 則吾倚閭而望。女今事王 王出走 女不知其處 女尚何歸？」。子供の帰りを待つ愁い。

送章彝下第

章彝の下第するを送る

綦母潜

長安渭橋路

長安渭橋いぎょうの路

行客別時心

行客こうかく別時の心

獻賦溫泉畢

賦を溫泉に獻じて畢おわりて

無媒魏闕深

魏闕ぎけつの深きに媒す無し

黄鶯啼就馬

黄鶯啼いて馬に就き

白日暗歸林

白日暗くして林に帰る

三十名未立

三十にして名未だ立たず

君還惜寸陰

君還また寸陰を惜しめ

【語釈】

○章彝：不祥。○下第：科挙に不合格となる。○渭橋：渭水に架かる橋。○行客：旅人。○獻賦溫泉：玄宗が温泉宮にあつた時に劉明霞なるものが「温泉賦」を獻じたが科挙に及第しなかつた。それを引用する。○魏闕：宮廷。○媒：仲介。○黄鶯：コウライウグイス。○白日：真昼の太陽。

哭空寂寺玄上人

空寂寺の玄上人を哭す

錢起

悽然雙樹下

悽然たり 双樹の下

垂涙遠公房

涙を垂る 遠公の房

燈續生前火

灯は続く 生前の火

爐添没後香

炉は添う 没後の香

陰塔明片雪

陰塔 片雪 明かに

寒竹響空廊

寒竹 空廊に響く

寂滅應爲樂

寂滅 応に為樂たるべし

塵心徒自傷

塵心 徒に自ら傷む

【語釈】

○空寂寺…不祥。○玄上人…未詳。○悽然…いたましい。○雙樹…釈迦が入滅した樹を借用。○遠公…晉の惠遠法師に比す。○陰塔…暗いきざはし。○寒竹…冬の竹（が雪で折れる音）。○應…「まさにくすべし」と読み、「くすべきである」「くしなければならぬ」の意。○寂滅爲樂…「般若心経」、煩惱の境を脱し、涅槃の境地にいたって、はじめて真の安樂が得られるということ。○塵心…俗世間の心。作者のこと。

送曹椅

曹椅そういを送る

司空曙

青春三十餘

青春 三十余

衆藝盡無如

衆芸 尽く如く無し

中散詩傳畫

中散ちゆうさん詩画しがに伝え

將軍扇賣書

將軍 扇書を売る

楚田晴下雁

楚田 晴れて雁下り

江日暖多魚

江日 暖かくして魚多し

惆悵空相送

惆悵ちゆうちやう 空しく相送る

歡遊自此疎

歡遊 此これ自り疎なり

【語釈】

○曹椅：不祥。○衆藝：各種の技能、芸術。○無如：及ぶ物がない。○中散：晉の嵇中散のこと、詩に巧みで、雇傭之がその詩を画に画いた。○將軍：晉の王羲之のこと。会稽の山陰にいたときに、老婆が来て書を乞い、扇に「清風來故人」の五字を書いて与えたら高く売れた。○楚田：春秋時代の楚の国の田畑。○惆悵：嘆き悲しむこと。

送金華王明府

金華きんかの王明府おうめいふを送る

韓翃

縣舍江雲裏

縣舍けんしや江雲の裏

心閑境自偏

心閑かにして境さかい自おのずから偏へんならん

家資陶令菊

家資かし陶令の菊

月俸沈郎錢

月俸げつぽう沈郎ちんろうの錢

黄蘗香山路

黄蘗こうぼく香山路

青楓暮雨天

青楓暮雨の天

時間引車騎

時に車騎を引くを聞かん

竹外有銅泉

竹外に銅泉有り

【語釈】

○金華：浙江省金華市婺城区。○王明府：不祥。明府は県令。○縣舍：県令の宿舎。○心閑境自偏：陶淵明飲酒其五「心遠境自偏」。○家資：財産。○陶令：陶淵明。○月俸：月の報酬。○沈郎錢：梁の沈約が金華の官であったので、その報酬をいう。○黄蘗：落葉喬木の名、キハダ。○香山：楚の地にある山。

和張侍郎酬馬尚書

張侍郎の「馬尚書に酬る」に和す

韓愈

來朝當路日

來朝 當路の日

承詔改轅時

詔を承けて 轅を改むる時

出領須句國

出でて 須句の國を領じ

仍兼少昊司

仍りて 少昊の司を兼ね

暖風抽宿麥

暖風 宿麥を抽んで

清雨卷歸旗

清雨 歸旗を卷く

賴寄新珠玉

賴に 新珠玉を寄す

長吟慰我思

長吟 我が思を慰む

【語釈】

○張侍郎：張賈。清河（河北省）人。德宗貞元二年（786）の進士、穆宗長慶元年（821）兵部侍郎となり、後兵部尚書となる。○馬尚書：馬總。扶風（陝西省鳳翔）の人。刺史を経て刑部侍郎となり、節度使を経て戸部尚書となる。○來朝：天子の命を受けて参内すること。○當路日：参内の日、馬尚書が鄆州（山東省西部）刺史から、戸部尚書に任ぜられて参内する日。○改轅：改めて車を繞らす。○須句國：鄆州。○少昊：刑部尚書。○宿麥：冬に植えて夏に収穫する麦。○新珠玉：馬尚書の寄せた詩。

送董卿赴台州

董卿が台州に赴くを送る

張 蠟

九陌除書出

九陌 除書出ず

尋僧問海城

僧を尋ねて海城を問う

家從中路挈

家は 中路より挈え

吏隔數州迎

吏は 數州を隔てて迎う

夜蚌侵燈影

夜蚌 燈影を侵し

春禽雜櫓聲

春禽 櫓声を雜う

開圖知異跡

図を開きて 異跡を知る

思上石橋行

思想す 石橋の行

【語釈】

○台州：浙江省台州市臨海市。天台山あり。○董卿：不祥。○九陌：宮中。○除書：辭令書。○海城：梵海城、寺院。○家：妻。○吏：台州の官吏達。○夜蚌：夜のハマグリ。○春禽：春の鳥。○石橋：天台山の景勝地。

過香積寺

香積寺こうしきへじに過ぎるよ

王維

不知香積寺

知らず香積寺こうしきへじ

數里入雲峰

數里うんぼう雲峰に入る

古木無人逕

古木 人徑無く

深山何處鐘

深山 何れの処の鐘

泉聲咽危石

泉聲 危石むせに咽むせび

日色冷青松

日色 青松ひややかに冷ひややかなり

薄暮空潭曲

薄暮 空潭くうたんの曲

安禪制毒龍

安禪 毒竜どくりゆうを制す

【語釈】

○香積寺：長安の南、終南山山中にある寺。○古木：冬枯れの木や林。○雲峰：雲がかかっている高い峰。○人逕：人の通う小径。○危石：高くそばだっている石。○空潭：人気のない淵。○曲：ほとり。○安禪：坐禅して雑念を去り、精神を統一すること。○毒龍：人を害する龍のことで、人の心に住む邪念をいう

(参考文献)

『新釈漢文大系 詩人編 3』



送友人尉蜀中

友人の蜀中に尉たるを送る

徐 晶

故友漢中尉

故友漢中の尉

請爲西蜀吟

請う 西蜀の吟を為せ

人家多種橘

人家 多くは橘を種え

風土愛彈琴

風土 愛して琴を弾ず

水向昆明關

水は 昆明に向つて關く

山通大夏深

山は 大夏に通じて深し

理閑無別事

閑を理して 別事無くんば

時寄一登臨

時に一登臨を寄せよ

【語釈】

○尉：武官。○故友：昔からの友人。○漢中：成都。○風土愛彈琴：漢の司馬相如が蜀の人で、琴の名手であったので、蜀の人が琴を愛すとした。○大夏：インド。○理閑：清閑無事であること。

與諸子登峴山

諸子と峴山けんざんに登る

孟浩然

人事有代謝

人事たいしゃ代謝有り

往來成古今

往來 古今に成る

江山留勝跡

江山しょうせき勝跡を留め

我輩復登臨

我輩わがはい復た登臨す

水落魚梁淺

水落ちてぎよりよう魚梁淺く

天寒夢澤深

天寒くしてぼうたく夢沢深し

羊公碑尚在

羊公の碑 尚お在り

讀罷一沾襟

讀み罷んで 一たびひと襟えりを沾す

【語釈】

○峴山：湖北省襄陽市にある山。○人事：人の世の営み。○代謝：次々と入れ替わること。○往來：ここでは栄枯盛衰という意味。○古今：古代から今まで。○江山：漢江と峴山。○勝跡：優れて名高い景勝の地。○漁梁：やな。○夢澤：雲夢の沢（うんぼうのたく）湖北省の湿地帯。○羊公：荊州の都督として陸抗と対峙していた羊祜は、荊州の領民を労わるはおろか 相對していた呉の將兵にまで 礼節を以て臨み敵味方問わずから 尊崇を集めていた。 そんな羊祜も病を得、重篤の身となると後任に杜預を推挙して没した。○碑：羊祜が病死、死を惜しんだ民により生前彼が好んだ峴山に碑が建立された。 その碑を見た者は皆在りし日の羊祜を偲んで涙を墮とすに及んだ。 墮淚碣という。

（参考文献） 『新釈漢文大系 詩人編 3』

寄邢逸人

邢逸人に寄す

鄭常

羨君無外事

羨む君が外事無くして

日與世情違

日に世情と違ふことを

地僻人難到

地僻にして人到り難く

溪深鳥自飛

溪深くして鳥自ら飛ぶ

儒衣荷葉老

儒衣荷葉老い

野飯藥苗野

野飯藥苗肥たり

若問湖邊意

若し湖邊の意を問わば

而今憶共歸

而今共に帰らんことを憶う

【語釈】

○邢逸人…不祥。逸人は自称語。

吳明徹故壘

吳明徹ごめいてつの故壘

劉長卿

古臺搖落後

古台 搖落の後

秋日望郷心

秋日 望郷の心

野寺人來少

野寺 人の來ることまれ少なり

雲峰水隔深

雲峰 水深きを隔つ

夕陽依舊壘

夕陽 旧壘に依り

寒磬滿空林

寒磬かんけい 空林に満つ

惆悵南朝事

惆悵ちゆうちやうす 南朝の事

長江獨至今

長江 独り今に至る

【語釈】

○吳公台：南朝の宋の劉誕が築いた弩台。○吳明徹：陳の將軍。○搖落：木々の葉が風に散る。○寒磬：寒中に響く磬の音。磬はへの字形の樂器。○惆悵：不各嘆き悲しむこと。○南朝：東晉から陳にいたる6つの王朝。

送樊兵曹潭州謁韋大夫

樊兵曹はんへいそうの潭州たんしゅう韋大夫いだゆうに謁するを送る

李嘉祐

寒鴻歸欲盡

寒鴻かんこう 歸りて 尽きんと欲す

北客始辭秦

北客 始めて 秦を辞す

零桂雖逢竹

零桂れいけい 竹に逢うと雖も

瀟湘少見人

瀟湘しょうしょう 人を見ること少なり

江花鋪淺水

江花 淺水に鋪しき

山木暗殘春

山木 殘春に暗し

修刺轅門裏

刺しを修す 轅門えんもんの裏うち

多憐爾爲親

多くは憐あわれむ 爾なんじが親の為にすることを

【語釈】

○樊兵曹：不祥。兵曹は軍事を司る官吏。○潭州：湖南省長沙市。○韋大夫：不祥。太夫は官名。○寒鴻：冬の鴻雁。○北客：故郷が北国に在る人。樊兵曹。○秦：長安。○零桂：零陵と桂陽（湖南省南部と広東省東部）。○瀟湘：蕭水と湘水が合流する洞庭湖地方。○修刺：名刺を提出すること。○轅門：軍門。

西郊蘭若

西郊蘭若

羊士諤

雲天宜北戸

雲天 北戸に宜し

塔廟似西方

塔廟 西方に似たり

林下僧無事

林下僧無事

江清日正長

江清くして 日正に長し

石泉盈掬冷

石泉 掬に盈ちて 冷に

山實滿枝香

山実 枝に満ちて 香し

寂寞傳心印

寂寞として 心印を伝う

無言亦已忘

無言 亦た已に忘る

○西郊：秋の郊外の野原。○蘭若：寺院。○北戸：北向き（長安に向かって）に建てられた建物。○塔廟：仏塔。○西方：仏教伝来の西域。○掬：手に水をすくう。○寂寞：ひっそりとして物寂しいさま。○心印：眞実の法。

送普門上人

普門上人を送る  
ふもんしょうにん

皇甫冉

花宮難久別

花宮 久しく 別れ難し

道者憶千燈

道者 千灯を憶う

残雪入林路

残雪 林に入る路

深山歸寺僧

深山 寺に帰る僧

日光依嫩草

日光 嫩草に依り  
どんそう よ

泉響滴春冰

泉響 春水を滴らす  
したた

何用求方便

何ぞ用いん 方便を求むを  
ほうべん

看心是一乘

心を看る 是れ一乘  
いちじょう

【語釈】

○普門上人…未詳。○花宮…寺院のこと。○燈…ここでは法灯。○嫩草…やらわかい若草。○何用…不要である、反語。○方便…俗人を説くために仏法の本質にかかわりないことを適宜応用すること。○乘…仏の教法。

送耿處士

耿処士を送る

賈島

一瓶離別酒

一瓶離別の酒

未盡即言行

未だ尽さざるに即ち行かんと言う

萬水千山路

万水千山の路

孤舟幾月程

孤舟幾月の程

川原秋色靜

川原秋色静かに

蘆葦晚風鳴

蘆葦晚風に鳴く

迢遰不歸客

迢遰として不歸の客

人傳虛隱名

人は虚隱の名を伝う

【語釈】

○耿處士…不詳、處士は官職に就かない在野の人。○秋色…秋景色。○蘆葦…あし。○迢遰…遙かに遠いさま。○虚隱…偽の隠者。



春喜友人至山舎

春友人の山舎に至るを喜ぶ

周賀

鳥鳴春日曉

鳥は鳴く春日の曉

喜見竹門開

喜び見る竹門の開くを

路自高巖出

路は高巖より出で

人騎瘦馬來

人は瘦馬に騎りて来る

折花林影動

花を折れば林影動き

移石澗聲迴

石を移せば澗聲迴る

更欲留深語

更に深語を留めんと欲すれば

重城暮色催

重城暮色催す

【語釈】

○澗聲…谷川の音。○深語…意味の深い話。○重城…山が重なって城郭のように見えるさま。

龍翔喜胡權訪宿

龍翔りゅうしょうに胡權こけんの宿を訪ぬるを喜ぶ

喻鳧

林棲無異歡

林棲りんせい 異歡いかん無し

煮茗就花欄

茗めいを煮て 花欄からんに就く

雀啄北窓晚

雀つばは啄つばむ 北窓くわいの晚くれ

僧開西閣寒

僧そうは開く 西閣かんの寒

衝橋二水急

橋はしを衝つきて 二水急なり

扣月一鐘殘

月つきを扣たたいて 一鐘殘る

明發還分手

明發めいはつ 還また手を分わつ

徒悲行路難

徒いたずらに悲かなむ 行路ぎやうろの難

【語釈】

○龍翔：龍翔寺、複数あり不確定。○胡權：不祥。○林棲：林の中の住居。○異歡：特別のもてなし。○花欄：花壇の闌干。○明發：明け方。

秋晚郊居

秋晚の郊居

任翻

遠聲霜後樹

遠声 霜後の樹

秋色水邊村

秋色 水辺の村

野徑無來客

野徑 客の來るきた無く

寒風自動門

寒風 自ら門を動かす

海山藏日影

海山 日影を藏し

江月落潮痕

江月 潮痕を落す

惆悵高飛晚

惆悵ちゆうちやうす 高飛たか晚おそく

年年別故園

年々 故園に別る

【語釈】

○秋晚…秋の終わりのころ。○郊居…郊外の住居。○遠聲…遠くから聞こえる落ち葉の音。○秋色…秋景色。○野徑…野径。○海山…海上の山。○藏日影…沈む日を納める。○江石…川辺の石。○落潮痕…潮が引いていった痕。○惆悵…悲しみ嘆く。○高飛…天下に飛揚する。○故園…故郷。

友人南遊不還

友人南遊して還らずかえ

于武陵

相思春樹緑

相思そうし春樹しゅんじゆ緑なり

千里各依依

千里おのおの各依依々

鄠杜月頻滿

鄠杜こと月しきり頻に滿つ

瀟湘人未歸

瀟湘人未だ帰らず

桂花風半落

桂花風半ば落ち

煙草蝶雙飛

煙草蝶なら双び飛ぶ

一別無消息

一別消息無し

水南車跡稀

水南車跡しやせま稀なり

【語釈】

○相思：相思樹、クワアズキ。○依依：離れがたく名残惜しいさま。○鄠杜：鄠  
県と杜県、共に陝西省に属する。○瀟湘：瀟水と湘水が合流する洞庭湖のあたり。  
○煙草：草叢の上にかかった靄。○水南：瀟湘の地方。○車跡：車のわだちのあ  
と。

夜泊淮陰

夜淮陰わいいんに泊す

項斯

夜入楚家煙

夜楚家の煙に入れば

煙中人未眠

煙中人未だ眠らず

望來淮岸盡

望み来れば淮岸わいがん尽き

坐到酒樓前

坐して到る酒樓の前

燈影半臨水

燈影半ば水に臨み

箏聲多在船

箏聲そうせい多く船せんに在り

乘流向東去

流ながれに乗じて東に向つて去れば

別此易經年

此こゝを別れて年へやすを経易からん

【語釈】

○淮陰…江蘇省淮安市淮陰区。○楚家…淮陰の家。○煙…炊煙。○箏…こと(唐の時代は13弦)。

秋夜宿淮口

秋夜淮口わいこうに宿す

景池

露白草猶青

露白くして草な猶お青し

淮舟倚岸停

淮舟わいしゅう岸よに倚りて停まる

風帆幾處客

風帆いくところ幾処かくの客

天地兩河星

天地りゅう兩河の星

樹靜禽眠草

樹しずか靜にして禽とり草に眠り

沙寒鹿過汀

沙寒くして鹿みぎわ汀を過ぐ

明朝誰結伴

明朝誰か伴ともを結ばん

直去泛滄溟

直ちに去りて滄溟そうめいに泛うかばん

【語釈】

○淮口…江蘇省揚州市。○淮舟…淮口の舟。○兩河…天の銀河と地の河海。○結伴…旅の道ずれなる。○滄溟…海。

村行

村行

姚  
揆

天淡雨初晴

天淡くして 雨初めて晴る

遊人恨不勝

遊人 恨うらみに勝たえず

亂山啼蜀魄

乱山 蜀魄しよくこん啼き

孤棹宿巴陵

孤棹こさう 巴陵に宿る

影暗村橋柳

影は暗し 村橋の柳

光寒水寺燈

光は寒し 水寺の灯

罷吟思故國

吟を罷やめ 故国を思う

窗外有漁罾

窓外に 漁罾ぎよそう有り

【語釈】

○遊人：旅人。○蜀魄：ホトトギス。○孤棹：孤舟。○巴陵：湖南省岳陽県。○漁罾：しかけ網。

題甘露寺

甘露寺かんろじに題す

曹松

香門接巨壘

香門 巨壘に接し

畫角間清鐘

画角 清鐘を問まじう

北固一何峭

北固 一いっに何ぞ峭しやうなる

西僧多此逢

西僧 多く此こゝに逢あう

天垂無際海

天は垂たる 無際むさいの海

雲白久晴峰

雲は白きゆうし 久晴きゆうせいの峰

旦暮然燈外

旦暮たんぼ 然燈ねんとうの外ほか

濤頭振蟄龍

濤頭とうとう 蟄竜ちつりようを振おこす

【語釈】

○甘露寺：江蘇省鎮江市の北固山にある寺。○香門：寺の門。○巨壘：石頭城址。  
○畫角：彩られ角笛。○北固：北固山。○峭：険しい。○西僧：天竺から来た僧。  
○濤頭振蟄龍：潮が満ちるときは、龍神が 地中に眠っている龍を起こして、龍  
灯を寺に献ずる。



# 前実後虚

秋夜獨坐

秋夜独坐

王維

獨坐悲雙鬢

独坐 双鬢そうびんを悲しみ

空堂欲二更

空堂 二更ならんと欲す

雨中山果落

雨中 山果落ち

燈下草蟲鳴

灯下 草虫鳴く

白髮終難變

白髮 終に變じ難し

黄金不可成

黄金 成すべからず

欲知除老病

老病を除くを 知らんと欲すれば

唯有覺無生

唯だ 無生むしよを覺さとるに有り

## 【語釈】

○悲雙鬢：髪が白くなったことを悲しむ。○空堂：人氣のない堂。○二更：夜の九時ころ。○黄金：道教の錬金術で作られる不老長寿の薬金丹。○無生：仏教用語、生と滅を超えた絶対的真理。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 3』

秋夜汎舟

秋夜舟を汎ぶ

劉方平

林塘夜汎舟

林塘夜舟を汎ぶ

蟲響荻颼颼

虫響荻颼々たり

萬影皆因月

万影皆月に因り

千聲各爲秋

千声各秋の為なり

歲華空復晚

歲華空しく復た晩る

鄉思不堪愁

郷思愁いに堪えず

西北浮雲外

西北浮雲の外

伊川何處流

伊川何れの処に流る

【語釈】

○林塘：樹林の池塘。○颼颼：寒気のみま。○歲華：年月。○西北：故郷の方角。  
○伊川：河南省を流れる川。

春日臥病

春日臥病し 懷を書す

劉商

楚客經年病

楚客 年を経て病む

孤舟人事稀

孤舟 人事稀なり

晚晴江柳變

晚晴 江柳變じ

春暮塞鴻歸

春暮 塞鴻歸る

今日方知命

今日 方に 命を知る

前年自覺非

前年 自ら非なるを覺る

不能憂歲計

歲計を憂うること 能わず

無限故山薇

限り無し 故山の薇

【語釈】

○楚客：楚の地方の出身で他郷に在る人（作者）。○人事：普通の人のすること。  
○塞鴻：北方国境の雁。○知命：五十歳。○前年：四十九歳まで。○歳計：生活費。  
○故山薇：伯夷・叔斉の故事。

林館避暑

林館避暑

羊士諤

池島清陰裏

池島清陰の裏うち

無人泛酒船

人の酒船を泛うかべる無く

山蛸金奏響

山蛸さんちよう金奏響きんそうきやうき

荷露水精圓

荷露かろ水精すいけい円まじかなり

静勝朝還暮

静勝せいしよう朝還ちやうまた暮ぼ

幽觀白已玄

幽觀ゆうくわん白はく已げんに玄

家林正如此

家林正こに此の如し

何不賦歸田

何ぞきでん歸田を賦ふせざる

【語釈】

○池島：池の中の島。○清陰：清涼な樹陰。○山蛸：山の蟬。○幽觀：世事と競走しない境地。○白已玄：白髪が黒くなる。○家林：故郷の林。○賦歸田：張衡が「帰田賦」を作って故郷に帰ったのに倣う。

柏梯寺懷舊僧

柏梯寺に旧僧を懐う

司空圖

雲根禪客居

雲根 禪客の居

皆說舊吾廬

皆説く 旧 吾が廬と

松日明金像

松日 金像に明かに

苔龕響木魚

苔龕 木魚響く

依棲應不阻

依棲 応に阻てざるべし

名利本來疎

名利 本來疎なり

縱有人相問

縦い人の相問う有るも

林間懶拆書

林間 書を拆くに懶からん

【語釈】

○柏梯寺：陝西省華州にあった寺。○雲根：石の異名。○松日：松の間から漏れる日光。○金像：仏像。○苔龕：苔むした塔の下の室。○依棲：他人の家に住むこと。○應：「まさにすべし」と読み、「すべきである」「しななければならぬ」の意。

早春

早春

司空圖

傷懷仍客處

懷かいを傷めて 仍なお客かくしよ処す

病眼却花朝

病眼 却かつて花朝

草嫩侵沙短

草わか嫩くして 沙を侵して短く

冰輕著雨消

冰 輕くして 雨を著つけて消ゆ

風光知可愛

風光 愛あすべきを知る

容髮不相饒

容髮 相饒あいゆるさず

早晚丹丘伴

早晚 丹丘の伴

飛書肯見招

書を飛あばして 肯あえて招かれん

【語釈】

○傷懷…心を痛めて悲しむこと。○客處…故郷を離れて寓居する。○却…背くこと。○花朝…花咲く朝（旧曆二月十四日ではない）。○嫩…草の柔らかいこと。○容鬢…旅で寓居するときに衰えた髪。○不相饒…勘弁しない。○丹丘…仙山の名。

江行二首

江行二首

司空圖

地闊分吳塞

地闊ひろくして 吳塞ごさいを分ち

楓高映楚天

楓高くして 楚天に映ず

曲塘春盡雨

曲塘きょくとう 春の尽くる雨

方響夜深船

方響ほうきょう 夜の深き船

行紀添新夢

行紀 新夢を添え

羈愁甚往年

羈愁きしゆう 往年より 甚はなはだし

何時京洛路

何れの時か 京洛けいらくの路

馬上見人煙

馬上に 人煙を見ん

【語釈】

○吳塞：吳の地方に設けられたとりで。○楚天：その地方の空。○方響：樂器の名。○行紀：紀行文。○羈愁：旅愁。○往年：以前の年。○京洛：長安。○人煙：炊煙。

春日

春日

李咸用

浩蕩東風裏

浩蕩こうとうたる東風とうふうの裏うち

徘徊無所親

徘徊はいかい親かしむ所無なし

危城三面水

危城きじょう 三面さんめんの水みづ

古樹一邊春

古樹こじゆ 一邊いっぺんの春はる

衰世難行道

衰世すいせい 道みちを行ない難がたし

花時不稱貧

花時はなとき 貧ひんに称なわらず

滔滔天下者

滔滔とうとうたり 天下てんかの者もの

何處問通津

何れの処ところにか 通津つうしんを問とわん

【語釈】

○浩蕩…広大なさま。○東風…春風。○危城…高くて険しい城。○一邊…一面。  
○衰世…衰乱の時代。○滔滔…多数のさま。○通津…四方八方に通じる津。



雲居長老

雲居うんきよの長老

王貞白

巘路躡雲上

巘路けんろ 雲を躡ふんで上り

來參出世僧

來りて參ず 出世の僧

松敲半巖雪

松は敲たたつ 半巖の雪

竹覆一溪冰

竹は覆おほう 一溪の氷

不説有爲法

有うゐ為いの法を説いわかず

非傳無盡燈

尽じんとう燈を伝つたうるに非ひず

了然方寸内

了然たる方寸の内

應祇見南能

應たに祇なんのうだ南能を見るべし

【語釈】

○巘路：山の尾根道。○出世僧：俗世を超越した僧（雲居長老）。○半巖雪：巖を半ば蔽う雪。○有爲法：世間に役立つ法。○傳無盡燈：仏教用語、伝灯は仏法を承け伝えること。○了然：明らかさま。○方寸：胸。○應：「まさにくすべし」と読み、「くすべきである」「くしなければならぬ」の意。○南能：禅宗六祖、大鑑禪師慧能。

送許棠

許棠を送る

張喬

離鄉積歲年

郷を離れて 歳年を積み

歸路遠依然

歸路遠きこと依然たり

夜火山頭市

夜火 山頭の市

春江樹杪船

春江 樹杪の船

干戈愁鬢改

干戈 鬢の改まるを愁え

瘴癘喜身全

瘴癘 身の全きを喜ぶ

何處營甘旨

何れの処に 甘旨を営まん

波濤浸薄田

波濤 薄田をひたす

【語釈】

○許棠：宣州涇縣（安徽省涇県）の人。懿宗咸通十二年（八七一年）の進士（五十歳）。  
江寧県の丞で終わる。○積歳年：多くの年月を重ねる。○依然：もとのまま。○  
干戈：戦乱。○鬢改：白髪になる。○瘴癘：風土病。○甘旨：（両親に捧げる）  
美味のもの。○薄田：貧しく瘦せた田畑。

穆陵關北逢人歸漁陽

穆陵関の北にて漁陽に帰る人に逢う

劉長卿

逢君穆陵路

君に逢う 穆陵の路

匹馬向桑乾

匹馬 桑乾に向う

楚國蒼山古

楚国 蒼山古く

幽州白日寒

幽州 白日寒し

城池百戰後

城池 百戦の後

耆舊幾家殘

耆旧 幾家か残る

處處蓬蒿遍

処々 蓬蒿遍し

歸人掩淚看

帰人 涙を掩いて看ん

【語釈】

○穆陵關：湖北省安陵にあった関所のことか。○漁陽：河北省薊県。○桑乾：山西省の北部から河北省に流れる川。○楚国：戦国時代の楚の国、今の湖南省、湖北省一帯。○幽州：河北省涿県。○耆舊：昔なじみの人々。○蓬蒿：荒れた土地に生える雑草。

早行寄朱山人放

早行して朱放しゅほうに寄す

戴叔倫

山曉旅人去

山曉あけて旅人りよじん去り

天高秋氣悲

天高くして秋氣悲し

明河川上没

明河川上せんじょうに没し

芳草露中衰

芳草露中に衰う

此别又千里

此の別れ又た千里

少年能幾時

少年能く幾時ぞ

心知剡溪路

心は知る剡溪せんけいの路

聊且寄前期

聊なげか且つ前期を寄す

【語釈】

○早行：朝早く出発すること。○朱放：河北省襄陽の人、浙江省紹興に移り、鑑湖のあたりに隱棲して多くの名士と交わった。左拾遺に任じられた。○秋氣：秋の気配。○明河：銀河。○川上没：川の上に見えた銀河が夜明けと共に消え去った。芳草：かぐわしい草。○少年：若いとき。○剡溪：浙江省紹興市の会稽山中の谷川、朱放の隱棲地。○聊且：二字で一語、しばしば自分の行為を謙遜する意味。○前期：将来の約束。

陝州河亭陪韋大夫眺望

劉禹錫

陝州せんしゅうの河亭かていにて韋大夫いたゆう ばいに陪ばいして眺望たうぼうす

雪霽太陽津

雪はは霽はる 太陽津

城池表裏春

城池 表裏の春

河流添馬頰

河流 馬頰ばけいを添ほえ

原色動龍鱗

原色 龍鱗りゅうりんを動うかす

萬里獨歸客

萬里 獨り歸る客

一杯逢故人

一杯 故人に逢あう

因高向西望

高よきに因より 西に向いて望のぞめば

關路正飛塵

關路 正に塵を飛とばす

【語釈】

○陝州：河南省三门峡市と山西省運城市の地方。○河亭：黄河河辺の亭。○韋大夫：未詳。○太陽津：陝州にある津の名。○城池：街の回りの堀。○河流：黄河の流れ。○馬頰：川の名。河北省東光を流れる。○原色：原野の色。○関路：関所の道。

巴南舟中

巴南はなんの舟中

岑參

渡口欲黃昏

渡口黃昏ならんと欲し

歸人爭渡喧

歸人渡を争かまひて喧し

近鐘清野寺

近鐘野寺に清く

遠火點江村

遠火江村に点ず

見雁思鄉信

雁きを見ては郷信きょうしんを思い

聞猿積淚痕

猿るいを聞いては淚痕るいこんを積む

孤舟萬里夜

孤舟万里の夜

秋月不堪論

秋月論ずるに堪えず

【語釈】

○巴南…四川省。○渡口…渡し場。○黃昏…夕暮れ。○鄉信…故郷からの便り。

宿關西客舍寄東山嚴許二山人

岑 參

關西かんせいの客舍かくしやに宿し 嚴・許二山人に寄す

雲送關西雨

雲は送る 關西の雨

風傳渭北秋

風は伝う 渭北いほくの秋

孤燈燃客夢

孤灯 客夢かくむを燃やし

寒杵搗鄉愁

寒杵かんちん 鄉愁きゆうを搗く

灘上思嚴子

灘上 嚴子げんしを思い

山中憶許由

山中 許由きよゆうを憶う

蒼生今有望

蒼生そうせい 今望み有り

飛詔下林丘

詔を飛ばして 林丘に下さんことを

【語釈】

○關西：函谷関より西の地方。関中（陝西省）。○客舍：旅館。○渭北：渭水（陝西省を流れる黄河の支流）の北。○客夢：旅先で見る夢。○寒杵：寒秋の砧の音。○鄉愁：故郷を思う愁い。○嚴子：漢の嚴子陵。光武帝の旧友であり、光武帝が招いたが応ぜず、灘の上で釣りをする隱棲生活を送った。○許由：堯帝が天下を譲ろうとしたが受けず箕山に隱棲した。○蒼生：人民。○林丘：嚴・許二山人が住むところ。

夜宿龍吼灘臨眺思峨眉隱者

夜りゅうこうたん龍吼灘に宿し峨眉がびの隱者を思う

岑 參

官舍臨江口

官舍 江口に臨む

灘聲已慣聞

灘聲 已に聞くに慣なろうう

水煙晴吐月

水煙 晴れて月を吐き

山火夜燒雲

山火 夜雲を燒く

且欲尋方士

且かつ 方士を尋ねんと欲す

無心戀使君

使君を恋うに 心無し

異郷何可住

異郷 何ぞ住まるべきや

況復久離羣

況いわ 復また 久しく群ぐんを離るるをや

【語釈】

○龍吼灘：嘉州（四川省樂山市一帶）にある灘。○峨眉：峨眉山（四川省にある山で）中国三大靈山や中国四大仏教名山の一つ。○使君：刺史（この場合嘉州刺史であった自身の役職のこと）。○羣：ここでは親戚、知人。



南亭送鄭侍御歸東臺

南亭に鄭侍御が東臺に帰るを送る

岑 參

紅亭酒甕香

紅亭酒甕香ばし

白面繡衣郎

白面繡衣郎

砌冷蟲喧坐

砌冷にして虫坐に喧しく

簾疎月到牀

簾疎にして月床に到る

鐘催離興急

鐘は離興を催して急に

絃逐醉歌長

絃は醉歌を逐いて長し

關樹應先落

關樹 応に先に落つべし

隨君滿路霜

君に隨う 滿路の霜

【語釈】

○南亭：南のあずまや。○鄭侍御：不詳、侍御は侍御史、御史台（檢察庁）に属する微官。○酒甕：酒がめ。○白面：年若き男。○繡衣郎：侍御史のうち強権を有する者。○砌：石畳。○牀：寝椅子。○離興：別離の情。○醉歌：酔っ払って歌う歌。○關樹：関門の樹木。

南溪別業

南溪の別業

岑 參

結宇依青嶂

宇を結んで青嶂に依る

開軒對綠疇

軒を開いて綠疇に対す

樹交花兩色

樹交わりて花兩色

溪合水重流

溪合して水重流

竹塢春來掃

竹塢春來りて掃う

蘭尊夜不收

蘭尊夜収めず

逍遙自得意

逍遙自得の意

鼓腹醉中遊

腹を鼓して醉中に遊ぶ

【語釈】

○結宇…舍屋を建造する。○青嶂…屏風のような青山。○軒…長廊の窓のあるもの。○綠疇…青田。○塢…山あい。○蘭尊…酒樽。○自得…得意。

泊舟盱眙

舟を盱眙くゐに泊す

常建

泊舟淮水次

舟を泊す 淮水わいすいの次ほとり

霜降夕流清

霜降りて 夕流せきりゆう清し

夜久潮侵岸

夜久くして 潮岸を侵し

天寒月近城

天寒くして 月城に近し

平沙依鴈宿

平沙 鴈よの宿するに依り

旅館聽雞鳴

旅館 雞の鳴くを聴く

鄉國雲霄外

郷国 雲霄うんしやうの外ほか

誰堪羈旅情

誰か 羈旅きりよの情に堪えん

【語釈】

○盱眙：江蘇省淮安市盱眙県。○淮水：江蘇省淮安市淮河。○郷国：家郷。○雲霄：天際。○羈旅情：旅情。

江南旅情

江南旅情

祖詠

楚山不可極

楚山極むべからず

歸客自蕭條

歸客きかく 自ら蕭條しょうじょう

海色晴看雨

海色晴れて雨を看

江聲夜聽潮

江聲夜潮を聴く

劍留南斗近

劍は南斗に留りて近く

書寄北風遙

書は北風を寄せて遙はるかなり

爲報空潭橋

為に報あず 空潭くうたんの橋きつ

無媒寄洛橋

洛橋らくきやうに寄するに 媒なかたち無しと

【語釈】

○楚山：楚の国の山々。○蕭條：物寂しいさま。○海色：海の色。○江聲：長江の波の音。○聽潮：潮騒の音に耳をすます。○南斗：星の名。劍留南斗近：『晋書』卷三十六、張華伝。書寄北風遙：李陵の「蘇武に答うるの書」〔『文選』卷四十一〕に「時に北風ほくふうに困り、復た德音ふくいんを恵せよ」（時因北風、復惠德音）とある。○報：返事をする。○空潭：人気がひとけないふち。○橋：たちばな。蜜柑の一種。○媒：ここではたよりを伝えてくれる人。○洛橋：洛陽の町を流れる洛水にかけられた橋。

（参考文献）『唐詩選』

冬日野望

冬日野望

于良史

地際朝陽滿

地際朝陽滿ち

天邊宿霧收

天辺宿霧収まる

風兼殘雪起

風は残雪を兼ねて起き

河帶斷冰流

河は断氷を帯びて流る

北闕馳心極

北闕心極に馳せ

南圖尚旅遊

南図尚お旅遊す

登臨思不已

登臨思已ます

何處可消憂

何れの処にか憂を消すべき

【語釈】

○地際…地の果て。○天邊…空の果て。○宿霧…夜からかかっていた霧。○兼…まじえる。○斷冰…くだけた氷。○北闕…宮廷の北の門、転じて宮城、皇帝。○馳心極…心の奥底から思いを馳せる。○南圖…南に行くこと。○登臨…高いところから下を見下ろす。

江南追懷

江南旅懷

祖詠

楚山不可極

楚山極むべからず

歸客自蕭條

歸客きかく 自おのずから蕭條しょうじょう

海色晴看雨

海色晴れて雨を看み

江声夜聽潮

江声夜潮を聴く

劍留南斗近

劍は南斗に留まりて近く

書寄北風遥

書は北風に寄りて遥なり

為報空潭橋

為に報たうたうず空潭くうたんの橋たちばな

無媒寄洛橋

洛橋に寄するに媒ばい無し

【語釈】

○楚山：楚の国の山々。○蕭條：物寂しいさま。○海色：海の色。○江聲：長江の波の音。○聽潮：潮騒の音に耳をすます。○南斗：星の名。○劍留南斗近：『晋書』卷三十六、張華伝。書寄北風遥：李陵の「蘇武に答うるの書」(『文選』卷四十一)に「時に北風ほくふうに因り、復た德音ふくいんを恵せよ」(時因北風、復惠德音)とある。○報：返事をする。○空潭：人氣ひとけのないふち。○橋：たちばな。蜜柑の一種。○媒：ここではたよりを伝えてくれる人。○洛橋：洛陽の町を流れる洛水にかけられた橋。

(参考文献) 『唐詩選』

早行

早行

劉郇伯

鐘靜人猶寢

鐘しずか靜なほにして人猶寢る

天高月自涼

天高くして月おのずか自おのずから涼し

一星深戍火

一星しんじゆう深戍の火

殘月半橋霜

殘月半橋の霜

客老愁城下

客かく老いて城下を愁い

蟬寒怨路傍

蟬寒くして路傍うらに怨む

青山依舊色

青山旧色よに依り

宛是馬卿鄉

宛あたかも是れ馬卿ぼけいが郷

【語釈】

○早行：朝早く出かけること。○深戍：遠くにある守備所。○城下：長安城下。  
○馬卿郷：漢の司馬長卿の故郷。成都。

逢播公

播公に逢う

周賀

帶病希相見

病を帯びて相見ること希なり

西城早晚來

西城 早晚來らん

山衣風壞帛

山衣 風帛を壞り

香印雨霑灰

香印 雨灰を霑す

坐久鐘聲盡

坐久しくして鐘聲尽き

禪餘嶽影迴

禪余 岳影迴る

却思同宿夜

却つて思う 同宿の夜

高枕說天台

枕を高くして 天台を説くことを

【語釈】

○播公…不祥。○西城…長安。○山衣…隱者の衣。○香印…卍形に香を置いて焚く香。○禪餘…座禪が終わった後。



宿山寺

山寺に宿す

賈島

衆岫聳寒色

衆岫しゅうしゅう 寒色聳え

精廬向此分

精廬せいろう 此に向つて分る

流星透疎木

流星りゅうせい 疎木を透し

走月逆行雲

走月そうげつ 行雲に逆う

絶頂人來少

絶頂ぜつてい 人の來ること少なり

高松鶴不羣

高松たかまつ 鶴群ならず

一僧年八十

一僧年八十

世事未曾聞

世事せじ 未だ曾て聞かず

【語釈】

○衆岫…多くの山々。○寒色…寂しい景色。○精廬…精舎、寺。○向…於と同じで場所を示す。○疎木…疎らな木立。○走月…走るように見える月。○世事…俗世間のこと。

懷永樂殷侍御

永樂の殷侍御を懷う

馬戴

石田虞芮接

石田 虞芮に接す

種柳白雲陰

柳を種う 白雲の陰

穴閉神踪古

穴閉じて神踪古り

河流禹鑿深

河流れて禹鑿深し

樵人應滿郭

樵人 応に郭に滿つべし

仙鳥幾巢林

仙鳥 幾か林に巢う

此會偏相憶

此の會 偏えに相憶う

曾供雪夜吟

曾て 雪夜の吟に供ぜしことを

【語釈】

○永樂：陝西省安康市石泉県。○殷侍御：殷堯潘、永樂県令となり後に侍御（弾劾を司る官）となった。○石田：耕作に適しない田畑。○虞芮：地名（「尚書伝」の故事）。○神踪：神仙の足跡。○禹鑿：伝説で禹が掘削して黄河に通ぜしめた場所。

題韋處士山居

韋處士の山居に題す

許渾

斷藥去還歸

藥を斷りて去つて還た歸る

家人半掩扉

家人半ば扉を掩う

山風藤子落

山風藤子落ち

溪雨豆花肥

溪雨豆花肥ゆ

寺遠僧來少

寺遠くして僧の來ること少なり

橋危客過稀

橋危くして客の過ぐるごと稀なり

不聞砧杵動

砧杵の動くを聞かず

應解製荷衣

應に荷衣を製することを解すべし

【語釈】

○韋處士…不祥。處士は官に使えない人。○砧杵…きぬた。衣を打って柔らかくし艶を出す。○荷衣…蓮の葉で作った粗末な着物。隱者の衣服。

送龍州樊使君

龍州の 樊使君はんしきんを送る

許棠

曾見邛人說

曾て 邛人きょうじんの説くを見る

龍州地未深

龍州地 未だ深からず

碧溪飛白鳥

碧溪 白鳥を飛ばし

紅旆映青林

紅旆 青林に映ず

土產唯宜藥

土産どさん 唯だ 薬にして宜しく

王租只貢金

王租おうそ 只だ 金を貢ぐ

政成閑宴日

政成りて 閑宴かんえんの日

誰伴使君吟

誰か伴う 使君の吟

【語釈】

○龍州：廣西崇左市龍州県。○樊使君：不祥。使君は刺史。○邛人：邛州（四川省邛崃市）の人。○紅旆：紅色の旗。刺史の威嚴を示す。○土産：土地の産物。○王租：租税。○閑宴：ひまでくつろぐこと。

送人尉黔中

人の黔中げいちゅうに尉たるを送る

周 繇

盤山行幾驛

盤山行くこと幾駅ぞ

水路復通巴

水路復また巴はに通ず

峽漲三川雪

峽には三川の雪を漲みなぎらし

園開四季花

園には四季花を開く

公庭飛白鳥

公庭白鳥を飛ばし

官俸請丹砂

官俸丹砂たんさを請うげん

知尉黔人後

知んぬ 黔人に尉として後

高吟採物華

高吟して物華を採らんことを

【語釈】

○黔中…重慶市重慶直轄県。○尉…武官の官名。○盤山…山また山。○巴…重慶市。○公庭…官府の堂。○丹砂…朱砂。意識として用いる。○黔人…黔中の人。○物華…景色。

道院

道院

王周

白日人稀到

白日人到ること稀なり

簾垂道院深

簾れんを垂れて道院深し

雨苔生古壁

雨苔うたい古壁こへきに生じ

雪鶴聚寒林

雪鶴せつかん寒林かんりんに聚まる

忘慮憑三樂

慮りよを忘るるは三樂さんらくに憑り

消閑信五禽

閑かんを消するは五禽ごきんに信す

誰知是官府

誰か知らん是れ官府なるを

煙縷滿爐の沈

煙縷えんる滿爐まんろの沈ちん

【語釈】

○道院：役人の休息所。○白日：昼間。○雪鶴：羽の色が雪のよう白い小雀。

○三樂：列子に説く「三樂」。○名医、華陀の五禽戯。体操のようなもの。○五

禽：糸のような煙。○沈：沈水香。

# 一意

終南別業

終南別業

王維

中歳頗好道

中歳より頗る道を好む

晩家南山陲

晩に南山の陲に家す

興來每獨往

興來りて毎に独往し

勝事空自知

勝事空しく自ら知る

行到水窮處

行ゆく到る水の窮まる処

坐看雲起時

坐して看る雲の起る時

偶然值林偶

偶然林叟に値い

談笑滯還期

談笑還期を滯らす

## 【語釈】

○終南…終南山。○別業…別荘。○中歳…中年。○頗…いささか。○道…ここで  
は仏教。○晩…晩年。○家…家を構える。○南山…終南山。○陲…ほとり、周辺。  
○毎…常に。ことあるごとに。○勝事…すぐれたこと。○空…只の意。○窮…お  
わる、水窮處は水源地。○林叟…きこりの老人。

(参考文献) 『新釈漢文大系 詩人編 3』

晚泊潯陽望廬山

晩に潯陽に泊し廬山を望む

孟浩然

挂席幾千里

席を挂く幾千里

名山都未逢

名山都て未だ逢わず

泊舟潯陽郭

舟を泊す潯陽の郭

始見香爐峰

始めて見る香爐峰

嘗讀遠公傳

嘗て遠公の伝を読んで

永懷塵外蹤

永く懷う塵外の蹤

東林精舍近

東林精舍近し

日暮但聞鐘

日暮但だ鐘を聞く

【語釈】

○潯陽：江西省九江市。○廬山：江西省九江市の近くの名山。○香爐峰：廬山の主峰。○遠公：晉の高僧慧遠、廬山の東林寺の住職。○塵外：俗世間の塵の外。○東林精舍：東林寺。



茶人

茶人

陸龜蒙

天賦識靈草

天賦てんぶ靈草れいそうを識る

自然鍾野姿

自然ぜん野姿やさを鍾あつむ

閑來北山下

閑かんに北山きたの下したに来る

似與東風期

東風とうふうと期きするに似たり

雨後探芳去

雨後ぼう芳さくを探さぐつて去る

雲間幽路危

雲間あやう幽路ゆうろ危きし

唯應報春鳥

唯ただだまさ応おうに報ほう春しゅん鳥ちようのみ

得共斯人知

斯この人ひとと共に知しることを得べし

【語釈】

○天賦…生まれつき。○靈草…めでたく良い草。ここでは茶。○野姿…自然で素朴な姿。○鍾…集める。備える。○北山…陸龜蒙の茶園があった山。○芳…新茶の芽。○報春鳥…ウグイス。

尋陸鴻漸不遇

陸鴻漸りくこうぜんを尋ねて遇わず

僧皎然

移家雖帶郭

家を移して郭かくを帶おぶと雖いえども

野徑入桑麻

野徑そうま桑麻に入る

近種籬邊菊

近ごろ籬りへん邊に菊を種え

秋來未著花

秋來未だ花を著けず

扣門無犬吠

門を扣けども犬の吠ゆる無し

欲去問西家

去らんと欲して西家を問う

報道山中出

報じて道う山中より出て

歸來每日斜

歸り来れば日つね毎に斜めなりと

【語釈】

○陸鴻漸：名は羽、復州（河北）の人、安史の乱後、東南地方に集まった自然派詩人の一人。○帶郭：負郭に同じ、城郭を後にすること。○野徑：のみち。○桑麻：桑と麻。○西家：西隣の家。○報道：答える。

（参考文献）

『唐詩三百首』

# 起句

軍中酔飲寄沈人劉叟

軍中に酔飲して沈人・劉叟に寄す

暢當

酒渴愛江清

酒渴江の清きを愛す

餘酣漱晚汀

余酣晚汀に漱ぐ

軟莎欹坐輒

軟莎欹坐穩やかに

冷石醉眠醒

冷石醉眠醒む

野膳隨行帳

野膳行帳に随い

華音發從伶

華音從伶を發す

數杯君不見

數杯君見えず

都已遣沈冥

都已に沈冥を遣る

## 【語釈】

○沈人・劉叟…共に不祥。○酒渴…酒を多量に飲んだときの渴き。○餘酣…酒に中る。○晚汀…夜の渚。○軟莎…柔らかいハマナスゲ。○欹坐…ひざを曲げて坐る。○野膳…粗末な食事。○行帳…テント。○華音…佳麗な音楽。○從伶…從者の伶人（音楽官）。○都已…已に。○沈冥…前後のことも分別出来ない状態。

題江陵臨沙驛樓

江陵の臨沙りんさの驛樓に題す

司空曙

江天清更愁

江天清くして更に愁う

風柳入江樓

風柳江樓に入る

雁惜楚山晚

雁は惜しむ楚山の晩

蟬知秦樹秋

蟬は知る秦樹の秋

淒涼多獨醉

淒涼せいりょう多くは独醉

零落半同遊

零落れいらく半ば同遊

豈復平生意

豈に復た平生の意ならんや

蒼然蘭杜洲

蒼然そうぜんたり蘭杜らんとの州

【語釈】

○江陵：湖北省江陵。○臨沙驛：江陵府に属する宿場。○江天：長江と空。○風柳：風にそよぐ柳。○淒涼：物寂しい、痛ましい。○零落：木の葉の散ること、ここでは落ちぶれること。○同遊：かつての友人。○豈復：反語。○平生意：かつて思っていたこと。○蒼然：日暮れの薄暗いさま。○蘭杜：蘭と杜若、共に香草。

送耿山人遊湖南

耿山人こうざんじんの湖南こくなんに遊ぶを送る

周賀

南行隨越僧

南行えつそう越僧えつそうに隨う

舊業一池菱

旧業きゅうぎょう一池いついけの菱かき

兩鬢已垂雪

両鬢りょうほん已すでに雪ゆきを垂たる

五湖歸挂罾

五湖ごこ歸かへりりて罾あみを挂かく

夜濤鳴柵鎖

夜濤やとう柵鎖さくさを鳴ならし

寒葦露船燈

寒葦かんい船燈せんとうを露つゆわす

去此更無事

此こゝより去いりて更さらに無な事ごとならば

却來猶不能

却來きやくらいすること猶なお能あたわらず

【語釈】

○耿山人：不祥。山人は山に隠棲している人。○越僧：春秋時代の越の国の僧。

○舊業：旧の別荘。○五湖歸：范蠡が功なつて後、五湖に舟を浮かべて去った故

事。○罾：よつであみ。○柵鎖：魚を捕らえるヤナ。○寒葦：寒々とした葦。○

却來：本拠地に戻る。

宿巴江

巴江に宿る

棲蟾

江聲五十里

江声 五十里

瀉碧急於弦

碧を瀉いで弦よりも急なり

不覺日又不

覺えず 日又た夜

爭教人少年

争か 人をして少年ならしめん

一汀巫峽月

一汀 巫峽の月

兩岸子規天

兩岸 子規の天

山影似相伴

山影 相伴うに似たり

濃遮到客船

濃に遮って 客船に到る

【語釈】

○巴江…三峽のあたり。○江聲…長江の流れる音。○碧…碧色の水。○弦…弦楽器における急弦。○少年…若い人。○巫峽…三峽の一つ。○子規…ホトトギス。○客船…旅客を乗せた船。

## 結句

送陵陳法師赴上元

陵陳法師の上元に赴くを送る  
りょうちんほうし じょうげん おもむ

皇甫冉

延陵初罷講

延陵初めて講を罷む  
えんりょう や

建業去隨緣

建業に去りて縁に随う

翻譯推多學

翻譯多学を推す  
お

擅場最少年

擅場最も少年

浣衣逢野水

衣を浣いて野水に逢い  
あら

乞食向人煙

食を乞いて人煙に向う

遍禮南朝寺

遍く南朝の寺を礼し

焚香古像前

香を焚く古像の前

### 【語釈】

○陳法師…不祥。○上元…江蘇省江寧県。○延陵…江蘇省江寧県。○建業…南京。

○翻譯…經典を梵語から漢語に翻訳する。○擅場…主席。

送從弟歸河朔

從弟の河朔かさくに帰るを送る

李嘉祐

故郷何可到

故郷 何かいっ到るべき

令弟獨能歸

令弟 独り能くよ歸る

諸將旌旆節

諸將 旌節ぼうせつを旌あらわす

何人重布衣

何人か 布衣ほいを重んず

空城流水在

空城 流水在り

荒澤舊村稀

荒沢 旧村稀なり

秋日平原路

秋日 平原の路

蟲鳴桑葉飛

虫鳴きて 桑葉飛ぶ

【語釈】

○河朔：河北省、山東省全域。○令弟：自分自身の從弟。○旌節：使臣や武將画素の印として持つ、羽毛で飾った旗指物。○布衣：布の衣。無位無官の者が着る。



喜晴

晴るるを喜ぶ

李敬方

到台十二旬

台に到りて十二旬

一片雨中春

一片雨中の春

林果黄梅盡

林果 黄梅 尽き

山苗半夏新

山苗 さんびよう 半夏新 はんかあらた なり

陽鳥朝展翅

陽鳥 ようう 朝 あさ に翅 つばさ を展 ひら べ

陰魄夜飛輪

陰魄 いんぱく 夜 よ 輪 りん を飛 と ばす

坐喜無雲物

坐 い ながら喜 よろこ ぶ 雲物 うんぶつ の無 な きを

分明見北辰

分明 めいめい に 北辰 ほくしん を見 み る

【語釈】

○台：浙江省台州市。○半夏：葉草の名。カラスビシヤク。○陽鳥：太陽。○陰魄：月。○雲物：雲などの障害物。

茅山

茅山ぼうざん

杜荀鶴

歩歩入山門

歩々ほほ山門いに入る

仙家鳥徑分

仙家ちやうけい鳥徑い分る

漁樵不到處

漁樵ぎしやう到らざる処

麋鹿自成羣

麋鹿びろく自ら群を成す

石面迸出水

石面ほうしゆつ水を迸出し

松頭穿破雲

松頭せんば雲を穿破す

道人星月下

道人星月の下

相次禮茅君

相次いでぼうくん茅君を礼す

【語釈】

○茅山：江蘇省鎮江市にある山。○歩歩：一歩一歩。○仙家：仙人の住居。○鳥徑：鳥だけが通れるような細く険しい道。○漁樵：漁夫ときこり。隠者のイメー  
ジ。○麋鹿：鹿。○道人：道教の修行をする人。○茅君：仙の祖。

# 詠物

山中流泉

山中の流泉

儲光羲

山中有流水

山中に流水有り

借問不知名

借問すれども名を知らず

映地爲天色

地に映じて天色を為し

飛空作雨聲

空に飛びて雨声を作す

轉來深澗滿

轉じ来りて深澗に滿ち

分出小池平

分れ出ずれば小池平かなり

恬澹無人見

恬澹人の見る無く

年年長自清

年年長しえに自ら清し

## 【語釈】

○借問…人に尋ねる。○天色…天空の色。○深澗…深い溪。○恬澹…安静。

冷井

冷井

孫欣

仙闈初鑿井

仙闈せんい初めて井うがを鑿うがつ

靈液沁成泉

靈液れいえき沁ひたして泉いずみを成なす

色湛青苔裏

色いろは湛たう青苔あおこけの裏うら

寒凝紫綆邊

寒さむは凝こる紫綆しこうの邊へ

銅瓶向影落

銅瓶どうへい影かげに向むかって落おち

玉甃抱虛圓

玉甃ぎよくしゆう虚まどかを抱かかいて円まどかなり

永頼調神鼎

永とこく頼たのつて神像かみづかを調ととのう

堯時奉萬年

堯時ぎようじ万年まんねんを奉ほうず

【語釈】

○仙闈…宮中。○靈液…天上の露。○青苔…緑色の苔。○紫綆…紫色のつるべ縄。

○銅瓶…銅製のつるべ瓶。○玉甃…玉のような石畳。○堯時…堯帝のとき、今の

天下太平の世をなぞらえる。

僧舎小池

僧舎の小池

張鼎

引出白雲根

引いて白雲の根こんより出で

潺潺漲蘚痕

潺潺せんせんとして蘚痕せんこんに漲みなぎる

冷光搖砌錫

冷光 砌錫ぜいしやくを揺うごがし

疎影露枝猿

疎影 枝猿しえんを露あわす

淨帶凋霜葉

淨は霜しもに凋しぼむ葉を帯おび

香通洗藥源

香は藥くすりを洗みう源みなもとに通とず

貝多文字古

貝多ばいた 文字古もりたり

宜向此中翻

宜よろしく此この中ちゆうに向むかつて翻ほんすべし

【語釈】

○白雲根…石のこと。○潺潺…浅い水の流れるさま。さらさら。○蘚痕…苔の生ずるところ。○砌錫…みぎりにかけてある錫杖。○貝多…貝多羅樹の葉。インドでは、経文を書き付けるのに用いた。転じて仏典。○翻…仏典を翻訳する。

聞笛

笛を聞く

戒  
昱

入夜思歸切

夜に入り 思歸切なり

笛聲寒更哀

笛聲 寒 更に哀し

愁人不願聽

愁人 聴くを願わず

自到枕邊來

自ら 枕邊に到り来る

風起塞雲斷

風起こりて 塞雲断え

夜深關月開

夜深くして 関月開く

平明獨惆悵

平明 独り 惆悵す

落盡一庭梅

落ち尽す 一庭の梅

【語釈】

○思歸…故郷に帰りたいたいと思う気持ち。○枕前…枕元。○塞雲…寨に懸かる雲。

○關月…関所（国境）に懸かる月、関山月。○平明…夜明け。○惆悵…嘆き悲しむ。

感秋林

秋林に感ず

姚倫

試向東林望

試こころみに東林とうりんに向つて望む

方知節候殊

方まに知る節候せつこうの殊ことなるを

亂聲千葉下

乱声せんしょう 千葉下り

寒影一巢孤

寒影 一巢孤なり

不蔽秋天雁

秋天の雁を蔽おおわず

驚飛夜月烏

夜月の烏を驚飛けいひす

霜風與春日

霜風と春日と

幾度遣榮枯

幾度か榮枯やを遣る

【語釈】

○節候：季節時候。

杏花

杏花

温  
憲

團雪上晴梢

團雪だんせつ晴梢せいしやうに上り

紅明映碧寥

紅明へきりよう碧寥へきりように映ず

店香風起夜

店は香かんばし風起る夜

村白雨休朝

村は白し雨休やむ朝

靜落猶聯蒂

靜かに落ちて猶ほぞお蒂ほぞに連なり

繁開正滿條

繁えだく開きて正えだに條えだに滿みつ

澹然閑賞久

澹然たんぜんとして閑かんに賞あする久ひさし

無以破嬌嬌

嬌嬌きやうじやうに似たるをいか奈いかんするともなし

【語釈】

○團雪：丸い雪（杏花）。○晴梢：晴れた日の梢。○紅明：赤い杏花。○碧寥：青天。店：酒屋、杏を植えて印とする。○蒂：花のほぞ。○澹然：余念の無いさま。○嬌嬌：董嬌嬌。美人の代名詞。



孤鴈

孤鴈

崔塗

幾行歸塞盡

幾行いくこうか塞さいに帰かへり尽つくく

念爾獨何之

念ねんう爾なんじが独いそくり何なにに之これく

暮雨相呼疾

暮雨ぼりう相あひ呼よびぶこと疾はやし

寒塘欲下遲

寒塘かんとう下くだらんと欲ほつすること遲おそし

渚雲低暗度

渚雲しよん低ひくして暗くらみわたり

關月冷相隨

關月くわんげつ冷ひやにして相あ随つう

未必逢矰繳

未まだ必かならずしも矰繳そうしやくに逢あわず

孤飛自可疑

孤飛こひ自おのら疑ずかうべし

【語釈】

○塞：塞のある北方の地。○寒塘：冷たい隄。○渚雲：渚にかかる雲。○關月：

国境の関にかかる月。○矰繳：矢に糸をつけて射るもの。

雨

雨

僧皎然

片雨拂簷楹

片雨 簷楹えんえいを払う

煩襟四坐清

煩襟はんきん 四坐清し

霏微過麥隴

霏微ひびとして 麥隴ばくろうを過ぎ

蕭瑟傍莎城

蕭瑟しょうしつとして 莎城さじょうに傍そう

靜愛和花落

靜に愛す 花に和して落つるを

幽聞入竹聲

幽かすかに聞く 竹に入る声

朝觀興無盡

朝に觀て 興 尽くること無し

高詠寄閑情

高く詠じて 閑情を寄す

【語釈】

○片雨：局部的に降る雨。○簷楹：家屋の軒の柱。○煩襟：心の悶え。○霏微：雨や雪がしきりに降るさま。○麥隴：麦畑。○蕭瑟：物寂しいさま。○莎城：ハマスゲの茂る街。○閑情：もの静かな心。